

NEW GAME ! NEW LIVED!!

残夏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

春にゲーム制作会社に入社する事になり、社会人として新たな世界へ一歩を踏み出した高坂二葉は、女性しかいないキャラ班になってしまった。

初めての環境で個性豊かな仲間と共に楽しいゲームを制作していく物語。

目次

新しい世界へ一歩を踏み出してみたら	1
イーグルジャンプ攻略初級	3
イーグルジャンプ攻略中級そしてラスボス戦	10
お昼とオヤツと社員証と	16
魔法もナイフも歓迎会もあるんだよ	26
二次会はしみじみと	35
休日	41
休日のヴァルキュリア	48
休日のヴァルキュリア2	55
夢い夢	64
血塗れの髑髏	78
血塗れの髑髏2	85
隙間	89

新しい世界へ一歩を踏み出してみたら

冬の寒さが薄れ、暖かい風が吹くようになった4月の春。

3年間の専門校生活を終え、憧れだったゲーム制作会社「イーグルジャンプ」に入社する事が出来た。

期待と不安で胸を膨らませイーグルジャンプの入口付近に来ると、学生服を着た中学生位の女の子がアタフタしながら立っていた。

「ん子供？…イーグルジャンプの社員のお子さんかな…ねえ君どうしたの？」

「え？あ、あの」

すぐ近くに来るまで気が付いていない様で突然見ず知らずの俺に声をかけられ、驚きそして警戒されてしまった。

「ごめん驚かせちゃったかな？…俺は今日からここに入社する高坂二葉、もしかして君のご家族がここに務めてて用事があるとか？良かったら呼ぼうか？」

「あ、いえ…私も今日からここで働く涼風青葉…18歳…です…」
「え…18？」

自分が思っていた歳よりもかなり上だった為、素で驚いてしまった。

「そう言う高坂さんはお幾つなんですか？」

「二葉でいいよ堅苦しいのは苦手なんだ…俺は21歳だよ専門校に通ってたからね」

「3歳も上ですかあ、私も青葉でいいですよ」

「うん分かった！でも同期だから気軽に接して欲しいな…堅苦しいのが苦手だから…本当敬語とか尊敬って言葉消えればいいのに…」

「アハハ…でも歳が離れていても同期の人がいて安心しましたよ」

「実は俺もだよ…新人が自分1人だけだったらどうしようって不安だったんだ…別々の担当になるかもしれないけどよろしくね！青葉ちゃん」

右手を前に出すと青葉ちゃんも右手を出し、互いに掌を握り合い握手をした。

「はい！」

「ねえ君達、そこで何しているの？」

『ウワツ!』

お互い手を慌てて離し声のした方へ顔を向けると、ピンク色の生地に胸元の大きなリボンが特徴の服を着た女性が初めに俺が青葉ちゃんに声を掛けた辺りに立っていた。

(青葉ちゃんの驚いた気持ちが分かったよ…)

「ああすいません、イーグルジャンプの社員さんですか？」

恐る恐る女性に話を掛けてみると、ニツコリと笑い首を縦にふつた。

「ええそうよ」

「そうなんですか！俺も今日ここに入社した高坂二葉です！」

「高坂…二葉くん…ああ！有名な専門校の卒業生がうちに入るって聞いてたけど貴方の事だったのね！私は遠山リンよ、じゃあそっちの子は妹さん？」

『え?』

遠山さんの目線を追って行くと、同じくイーグルジャンプに入社する青葉ちゃんに行きついた。

「わ、私もイーグルジャンプに入社する涼風青葉！18歳です!!二葉さんの妹じゃないです！あの…私が入社する事聞いてます?…」

「え?18!!ご、ごめんね…大丈夫よちゃんと聞いているわ！因みに2人共私と同じチームよ！」

「よかったあ、話なれた人が同じチームで…」

胸を下ろし安堵のため息をはくと、遠山さんの顔がこわばった。

「えつとね…二葉君には申し訳ないと思うけど…私達のチームの男子は君だけなの…」

「え…」

イーグルジャンプ攻略初級

「私達のチームの男子は君だけなの…」

「え…」

その言葉を聞いた瞬間に自分が描いていた社会人ライフが音を立
てて崩れていった。

「まじかどうしよおとこひとりとかやばまじやばあーおわったおわつ
たわハブられるおとこひとりとかハブられるんじゃないね」

「二葉さんが壊れた!」

「お、落ち着いて二葉君!!皆いい人達だから大丈夫よ!」

「えらい賑やかやなありませんこないな所で何してるんですかあ?」

「ヒツ!」

突然聞こえた女性の声に思わず変な声を出してしまった。

「…落ち着いて二葉君…あら飯島さん今日は早いのね?」

「はい…妹がうちの布団でおねしよしまして…二度寝できん状態に
…」

「朝から災難ね…」

「ほんまえらい事になったんですよ…所でその二人は誰なんです
?」

「今日から私達と同じキャラ班で働く新入社員よ、先に自己紹介し
ちやいましょうか」

「え!?!新人さん!?!」

青葉ちゃんと二葉君を交互に見ると、青葉ちゃんは少し緊張してい
てもちゃんと飯島さんの方を見ているが、問題の二葉君は完全に背を
向けてしまってる。

(ん…ここはまず青葉ちゃんの自己紹介をお手本として見て貰いま
しょう)

「青葉ちゃん最初に自己紹介頼めるかしら?」

「あ、はい分かりました!今日からキャラ班でお世話になります涼風
青葉です!」

「ほら!次は二葉君の番よ!!」

「ちよ!?待っ…ドワツ!!」

青葉の自己紹介が終わり未だに背を向けたままの二葉肩を持ち、力いっぱい引いて正面を向かせた。

「さあ頑張って!!」

「ウグ…」

りんさんと青葉ちゃんに応援の眼差しをうけ、逃げる事が不可能と諦めて自己紹介をする事にした。

「スーハー…」

深呼吸を数回繰り返しクリーム色の髪を左右で二つに結び、緑色のリボンを付けた飯島と言う女性を見つめた。

「俺も今日からキャラ班でお世話になる高坂二葉です!よろしくお願います!後堅苦しいのが苦手なので二葉と呼んでください!!」

『…』

勢い任せの自己紹介を終えると沈黙が辺りを包んだ。

(おおおおおッ…何だこの沈黙…やっちゃまったのか)

「えっ…」

「え?」

「えええ!!」

謎の沈黙タイムを終わらせたのは意外な事に飯島さんの方で、鞆から手鏡を取り出し髪型や服装を確認し始めた。

「アカン!新人さんに男子居るんやったらもう少しお洒落してきたのに…変な所ないよなあ?」

「あ…あれ?」

「ね!大丈夫でしょ?」

「はあい…」

意外なりアクションに呆気にとられショルダーバッグが肩からずり落ちそうになるが、かけ直し冷や汗を拭くのと同時に飯島さんの身だしなみチェックが終わったようだった。

「あの…うちも青葉ちゃんと二葉君と同じキャラ班の飯島ゆんいいます!分からない事があつたら遠慮なく聞いてな!あ、私の事はゆんつて呼んでな…うちも堅苦しいのが苦手やから」

少し童顔なゆんさんの笑顔を見て、心が少し楽になった気がする。
「自己紹介も済んだ事だしそろそろ中に入りましょうか青葉ちゃん二葉君ついて来て、序に中を案内するわね」

『はいー』

「そう言えば二葉君は何で自己紹介の時にあんなにガチガチに緊張しとったん？」

「そ…それは…」

「プツ、あつはははッハブられるてんな事する訳ないやん！他の班のメンバーは皆優しい人やから安心しいや？」

数分前社内をゆんさんとりんさんに案内してもらっている最中ずつと緊張していた理由を尋ねられ、根気に負け理由を包み隠さず話してしまい今に至る。

「うう…だって女性しかいないキャラ班に男1人だけって…絶対ハブられるじゃないですか…」

「それやるんは学生までやと思う…：うちは異性が居った方が女性とは別の意見とか聞けるって思っとるし、男つ気が無かったから二葉君入って来て嬉しいよ！勿論女の子の青葉ちゃんも大歓迎よ！」

「ありがとうございますゆん先輩！本当良かったですな二葉さん！」

「本当良かったよ…」

「フフ、さあ着いたわよ！ここが私達のオフィスよ！」

りんさんが社員証で扉を開け俺達がこれから働くオフィスが目の前に広がり、キャラ班のブースに案内してもらった。

「それでここがキャラ班のブースで、ここが二葉君の席でこっちが青葉ちゃんの席ね」

「あ、うち二葉君の隣りや！分からん事あったら何でも聞いてな！」

指定された自分の席に着くと、少し遅れてゆんさんが右隣りの席に座わった。

「頼りにしています！青葉ちゃんは俺の真後ろの席かあ」

「話せる人が近くでよかったですよお」

「二葉君達は何かのむ？」

りんさんがブースの入口から顔を出し、安心した笑っている。
多分俺の事を気にかけてくれていたんだと思う。

「うちは大丈夫です」

「じゃあ私はオレンジ…」

（まて青葉！もう社会人何だからここは珈琲でしょ？）

「珈琲のブラックで！」

「青葉ちゃん大人だねえ、俺はオレンジジュースをお願いします」

「わかったわ、少し待ってて」

「え？」

「ん？」

青葉ちゃんに驚いた顔でガン見された。

「いえ…何でもないです…」

（大人でも珈琲飲まない人いたんだ…）

「リンく私も珈琲くつていな…い…い…」

気の抜けた声と共にブースの入口にりんさん以外の下を履いていない女性が現れ、俺と目が合い動きが止まった。

「ちよ八神さん!？」

「パ…パ…パンツウ!？」

「キヤヤヤヤツ!？な、何でキヤラ班に男がいのよ!!」

「二葉君!!」

「二葉さん!!」

「へ?」

『見たら!!「アカンよ!!」いけません!!』

「グオ!？」

ゆんさんと青葉ちゃんからでタツクルをくらい椅子から押し倒され、顔に何かが覆いかぶさり目の前が暗くなりいい匂いが鼻を擦った。

「何の騒ぎって!?!こうちゃん二葉君がいるからスカート履いて!!」

「もう見られたよりん!!何でキヤラ班のオフィスに男子がいるんだよ!?!ああもう!スカート取って!!」

「新入社員の中に男性社員がいるからちゃんとした服装をしといてっ

て何回も言いしました！ほら早く履いて！」

(俺が状況を掴めないまま話が進んでいく…)

事故とは言え女性のパンツを見てしまった為、謝罪をしようと思いついて顔に覆いかぶさった物をどけようと手を伸ばした瞬間にピクンと動いた。

「ヒヤンツ!?ちよ…ちよつと二葉君脇腹を触ったアカン!!擦りたい！」

(この覆いかぶさっているのはゆんさんか)

「じゃあ離れてください…眼鏡くい込んで痛いんですよ…」

「ま…まだ駄目や!八神さんがスカート履くまで待つてなあ」

「頑張ってください二葉さん!!」

(すぐ近くで青葉ちゃんの声がする…まさか青葉ちゃんも乗っかってるのか…)

「スーハー」

「んんツ…つてコラー！」

「いてツ…」

仕方なく退かすのを諦めやたら息苦しくなり、深く息を吸うと何故か頭を軽く叩かれた。

「大きく呼吸するの禁止や！」

「息苦しいんですけど…かなり…それと凄いいい香りがします」

「匂いを嗅ぐのも禁止や!!」

「イテツイタツ…」

今度は2回叩かれてしまった。

「飯島さん青葉ちゃんもう大丈夫よ、どいてあげて」

「わかりました」

「はい、全く八神さん!次は気を付けてくださいよ?」

りんさんの言葉を合図に顔にへばりついていたゆんさんがゆつくりと離れていき、そこで俺の顔に押し付けられていたのが胸だった事に気づいた。

「…二葉君のエッチ…」

そう言い残しゆんさんは席に戻った。

「二葉さん大丈夫でしたか？」

「大丈夫だよ、ちよつと目と鼻が痛いけど…」

(小さい様に見えて結構なかなかモノをお持ちで…)

青葉ちゃんは近くで俺の具合を見てくれている。

「どうしようりん!!下着見られたあオカズにされたらどうしょ…」

「オカズって…こうちゃんがそんな格好をしているからでしょ！」

駄々を捏ねりんさんに泣きつく子供の様な女性に近づき、謝罪の意味で深々と頭を下げた。

「事故とは言え失礼な事をしました、本当にすいませんでした」

「二葉君は悪くないのよ?こうちゃんがだらしがないのがいけないのよ?」

「それはそうだけどさ…オカズにしない?…」

涙目で睨まれ質問の回答を迫られる。

「オカズ?」

「青葉ちゃんは知らなくていい事だよ…その点は大丈夫ですよ…見慣れているので…」

『見慣れてる!?!』

先程からすましていたゆんさんも含めたキャラ班の女性4人の声が重なり、視線が俺に突き刺さった。

「ふ、二葉君?!見慣れとるってどないな意味!?!」

「二葉さんまさか!?!」

「二葉君…そんな…」

「俺のだらしがない姉がですね…家にいる時は下着姿なんですよ…否が応でも見慣れてきますよ…」

「二葉君のお姉さん?…」

「はい、姉です」

4人全員が安堵のため息を吐いた。

「ハア…何か馬鹿馬鹿しくなってきた…もういいや…こっちこそごめんね、私はキャラ班リーダーの八神こうよろしくね」

気持ちを切り替え真つ直ぐ俺と青葉ちゃんを見つめ、先に自己紹介をしてくれた。

「高坂二葉です！よろしくお願いします！」

「涼風青葉です！よろしくお願いします！」

「有名な専門校卒業生か即戦力…とまでは言わないが、少し厳しめですやらせてもらおうよ？」

「戦力として活躍できるように頑張ります！」

俺と目を合わせ期待を込めた笑顔をで首を縦にふった。

「青葉は高卒だよ？私も高卒でここに来たんだ」

「本当ですか!？」

「うんだからまず基礎から固めて色々な知識を学ぶ事から始めようか、分からない事は私やりん達に聞いて」

「はい分かりました！」

イーグルジャンプ攻略中級そしてラスボス戦

「ほとぼりもさめた事だし飲み物どうぞ、コウちゃんの分の珈琲もあるわ」

「ありがとうございますりんさん」

「サンキューりん、ゆんの分はって…持参か、しかももうイヤホンして
仕事中…」

「じゃあ頂きます」

りんさんからそれぞれ頼んだ飲み物が入ったカップを受け取り、しばし会話を続ける。

「八神コウさんってフェアリーズストーリーのキャラクターデザイン
のですか?」

「お!そう初めて私がメインキャラデザインやったんだよ」

「凄い!私小学生の頃ハマってたんですよ!」

「懐かしいなあフェアリーズストーリー!俺もハマったなあエクスカ
リバーとイーグリスシールドにペンドラゴンアーマーをやつとの思い
で揃えたなあ」

「え!?二葉それ超超高難易度のクエストのモンスターが落とす伝説級
の武器に防具だよ!?超マニア用に冗談で作ったのにクリアしたの!」
「そんなクエスト有ったんですか?」

「流石に青葉はそこまで行ってないか…全アイテム防具や武器を集
め、全クエストをクリアした時にのみ解放されるクエストなんだよお
…うん珈琲美味しい」

「へえそんなシステムになっていたんですか!八神さんも珈琲なん
ですか?」

俺の時とは違った満足そうな顔をしていた。

「もって事は青葉も?私は砂糖とミルク入りだよ」

「はい!私はブラックです!大人なので…ズズズ…ケホツケホツ…
苦っ!!」

珈琲を一口飲んだ瞬間苦味で咳き込み、近くに駆け寄り背中を摩
る。

「なんだよ…飲めないんじゃない青葉…」

「アハハ…無理しちゃ駄目だよ青葉ちゃんはい交換、まだ飲んでないから」

「え？あの…」

咳が止まった後青葉ちゃんが持つ珈琲の入ったカップを取り上げ、変わりに自分のオレンジジュースのカップを渡した。

「実は俺はブラック派でしたあゝ」

「うわ…本当にブラック飲んでるよ二葉の奴…」

珈琲を飲み、悪戯な笑で自分はブラックが飲めるアピールをする。主に青葉ちゃんに。

「もしかして私がこうなる事をよそうして？」

「内緒♪お!!イーグルレンジャーのイエローイーグルの限定フィギュアだ!しかも初代の!!」

珈琲片手に自分のデスクに戻る時戦隊のフィギュアやロボット等が沢山並んだデスクの一体目が釘付けになった。

「君!イーグルレンジャー知ってるの!?!誰推し?」

フィギュアを眺めているとショートカットのボーイッシュな女性が目をキラキラさせ、息がかかる位の距離まで顔を近づけてきた。その俺を見つめる瞳には、戦隊物を愛する熱意を感じられた。

「俺は初代イエローイーグルかな」

「おお!私も初代イエローが好きなんだよ!本当にいいよね!」

「まくたはじめの語が始まったで、長いから気いつけや?」

イヤホンを片方外し不機嫌そうな顔で俺を見つめるが、目の前の女性の事について助言をするとまたイヤホンをはめ仕事に戻った。

(まだ…怒っているのか…)

「ゆんの言う通りはじめは語り出すと長いよお」

「程々にはじめちゃん」

「善処しまくす」

「アハハでも初代イエローは本当に恰好いいですよね」

「そんなになんですか?」

オレンジジュースを飲みながらキョトンとする青葉ちゃんを他所

に、はじめと言う女性は語り出した。

「凄く恰好いいだよ！本当に!!片思いの女性トウコが敵に捕まっちゃってイエローが1人で助けに行くんだけど、イエローが攻撃を庇って死にかけるんだ…それでイエローの最後の言葉が本当にぐつと来るんだよ！」

「俺は…世界よりも…平和よりも貴女だけを守るヒーローでありたいと思ってしまった…きつとこれはそんな自分勝手な俺への罰なんです…だから貴女が気に病む事はありません…トウコさん貴女はずつと笑ってください…一輪の花に捧げる男道!!さあじけて言つて敵を道連れにして死んじゃうだ」

「凄い！全暗記だ！なかなかのマニアだね君！」

「貴女こそ期間限定フィギュアを持っているなんて尋常じゃない特撮への愛を感じます！」

「凄いなあ二葉…はじめと語り合っている…」

(…ところで…この人…誰だろ?…)

興奮のあまり話し込んでしまったが、冷静に考えるとお互い見知らぬ人物と話していた事に気づいた。

「えつと…君とそこのツインテールちゃんは…誰？」

(…い…今更!?)

「えつと…今更ですが今日から新入社員としてキャラ班でお世話になります、高坂二葉です」

「私も今日からキャラ班でお世話になります！新入社員の涼風青葉です！」

「後輩が2人も!!しかもイーグルレンジャーの事を語れる人が入ってくるなんて最高だよ!!あ、私は篠田はじめ！はじめでいいよ！キャラ班のオフィスにいるけどモーシヨン班なんだけどそこを気にしないで仲良くしてくれたら嬉しいなあ」

「全然気にしませんよ！」

「俺もですよ」

俺が男子だと言うのをまるで気にしない様子で話し続けるはじめさんを見てりんさんやゆんさんの言葉が本当だったと実感してい

ると、後ろから袖口を捕まれ振り返るとイヤホンははずしたゆんさんが優しい笑顔で飴を差し出してきた。

「よう頑張ったなあ偉いで二葉君！、御褒美に飴ちゃんあげる！」
「あ…ありがとうございます…」

地味に子供扱いされ複雑な気持ちで飴を受け取る。

そして朝礼まで各々自分ののに着き、色々な事をし始めた。

「…おはようございます…」

「あ、おはようございます…あれ？…」

「おはようございます！涼風あ…」

貰った飴を眺めていると小声の挨拶がブースの入口から聞こえ、顔を向けると長い髪をポニーテールに結った女性と目があい挨拶や自己紹介をしようとした時に何故か慌てて目を逸らされ言葉の途中で足早に俺の左側の自分の席に着き、イヤホンをされてしまった。

「あ…あれ…今…あれ…怒ってる？」

…俺達何かした？」

「な…何もしてないですよ？…」

コウさんのパンツ騒ぎを除けば皆フレンドリーに接してくれだが高さか最後の1人、しかも自分の隣の席の女性にガン無視されるとは思っても見なかった。

（青葉ちゃんとりんさんがプロリーグでゆんさんが初級、はじめさんが中級でコウさんのパンツ騒ぎがボス戦ならこの人がラスボス!!
イーグルジャンプ攻略不可能かも…）

「ああひふみ先輩か、二葉君と青葉ちゃん
今のが滝本ひふみ先輩で、人見知りでな会話が少し苦手やから用があ

る時とかはメッセの方がええよ」

「そ…そうだったんですかあ…よかった…」

「安心しましたあ…」

青葉ちゃんも自分の席に着きひふみさんにメッセを送るため、PCを立ち上げ初めた。

「メッセで自己紹介か…え？」

すぐ隣の人物にわざわざメッセを送るのにもどかしさを感じながらメッセを送ろうとした時、まさかの滝本さんからメッセが届いていた。

「さっきはごめんね！私男の人とあまり話した事ないし、喋るのが苦手なんだ…（。>?<。）私もキャラ班だから何かあったら聞いてね！あとひふみでいいからね（^ω^）」

「お…お…」

（…何かイメージど違うメッセきた。▽。▽。！?!これ本当にひふみさんからのメッセか?…）

ひふみさんとディスプレイのメッセを交互に見るが、やはり同一人物からのメッセとは思えなかった。

「今日から新入社員としてキャラ班でお世話になります、高坂二葉ですよろしくお願いしますm（| |）mあ、堅苦しいのが苦手なので俺は二葉とよんでください（、ω、）ノ」

「つと…これでいいかな?…」

柄にもなく顔文字を使ってみたものの、これで意味があっているのか不安だが送信してみる。

「フフツ…」

「へ?笑った?」

微かな笑い声に釣られ、ひふみさんに視線を向けるとディスプレイを見ながら微笑んでいた。

（こんな顔出来るんだ…）

「ヒツ!？」

「あ…」

無表情だった彼女が不意に見せた笑顔に思わず見とれていると俺

の視線を感じたかのか、顔をこちらに向けひふみさんと目があってしまった。

「えっと…その…た…滝本ひふみ…です…よろしく…お願いします…」

「高坂二葉です！お世話になりますひふみさん、後無理しないでメッセで大丈夫ですよ」

「ウウ…ありがとう…ごめんね…」

2回目の自己紹介を終え少しひふみさんとの距離が縮まった気がしたが、まだまだ普通に話すのは先の事になりそうだった。

「さて全員揃ったし、二葉達の紹介を兼ねて朝礼をしますか!!」

「そうね！二葉君、青葉ちゃん付いてきて、皆に紹介するから」

「分かりました！緊張するね青葉ちゃん」

「は…はい…そうですね…」

お昼とオヤツと社員証と

イーグルジャンプの皆さんに自己紹介を済ませた後にコウさんに呼ばれ青葉ちゃんと共にリンさんと共同のブースに来たのだが、ジュースのペットボトルやエナジードリンクの空き缶等のゴミがブースの半分に散らばっているのがまず先に目に付いた

きつともう半分の綺麗なブースはりんさんの領土なのだろう。

「それじゃあダブルリーフには何してもらおうかな〜」

『ダブルリーフ?…』

「二葉君も青葉ちゃんも名前に葉って漢字があるでしょ?それで二人合わせてダブルリーフだとおもうわ…」

『ああ…なるほど』

俺達に謎の名前をドヤ顔でつけたコウさんだが、全く意味が分からずポカンとしているとその光景を見かねたりんさんが「ダブルリーフ」について説明をしてくれてようやく意味が分かった。

「な…なんだよ…意味伝わってなかったのかよ…」

「アハハ…」

「すいません八神さん…」

「ハア…まあいや…青葉3Dの経験は?」

ため息をつくとおちやらけた顔が一変し、キリツとした真剣、またはプロの顔つきになった。

「すいません…絵以外の事は何も…」

「OK大丈夫!」

ガサゴソとデスクの上の書類や資料の山から一冊の本を発掘し、表紙の誇りを軽く払い青葉に差し出した。

「この参考書の1章をやるように!」

「は…はい…」

「んじや青葉は戻っていいよ〜」

「え…分かりました…」

不満そうな顔をして自分の席に戻って行く。

「二葉には早速仕事してもらおうよ?」

「分かりました、それで何をすればいいですか？」

「えつとまずはこれ見て」

現在仕事で使用しているのとは別のディスプレイを立ち上げるとRPG風の街が広がり、石で出来た噴水の近くに金髪の鎧を纏った少年のキャラが立っていた。

「凄い…これコウさんが作ったんですか？」

「えへへ照れるなあ…そうだよ！そして今動かしているPCが今作っているゲームのキャラの主人公だよ」

ゲームのコントローラーを使い、PC（プレイヤーキャラ）をジャンプさせたり様々なモーションをさせた後近くの店に入った。

「内装も細かい…本当に凄いですね…他にキャラが居なくて寂しいですが…」

「フーン！寂しいのは当然だよ、だって二葉の最初の仕事はこの街を賑やかにする事だからね！本来なら私がキャラをデザインしてそれをモデリングして3Dキャラに残させるんだけど、二葉は全くの初心者って訳でもないから実力を見るためにキャラのデザインから初めて貰うよ」

「この街を賑やかに…！」

胸が高なった。

ずつと憧れていたゲーム制作に入社する事ができ、全キャラではないものの自分が考えたキャラをゲームに登場させる事が出来るチャンスがこんなにも早く来るとは思ってもみなかった。

「もしかして自信ないとか言わないよねえ？」

「まさか、任せてください！それと…コウさん」

「ん、何？」

「いきなりで失礼だと思えますが！コウさんのデスク周りを片付けさせてくれませんか？」

「へ？」

「私も手伝うわ、時間かかるから帰る時に片付けるつもりだったのだけれども2人居ればすぐ片付くわね！」

大きなゴミ袋を持ったりんさんがゴミの散らばるコウさんの領土

に入つて来ると、コウさんは驚いた顔で俺とりんさんの顔を交互に見ている。

「べ…別に片付けなくてもいいよ！後で私がやるから!!」

「駄目よコウちゃん！今片付けるの!!大丈夫よ私と二葉君でやるからコウちゃんは自分の仕事をしていて」

「姉もよく部屋を汚すんですよ…それでこのブース見てると姉がいる様な気がして集中出来ないんですよ…」

「う…分かったよ…全く…リンが2人になつたみたいだ…」

「それじゃあ私がデスクを片付けるから二葉君は床に落ちているゴミの片付けをお願いするわ」

「分かりました!」

コウさんの許可を（無理矢理）貰いりんさんと手分けして片付けていく。

「やっぱり2人がかりだと捗りますね」

「そうね!もうすぐ終わりそうね」

「ムウウ…」

ムスツとした顔で仕事をしているコウさんをよそにどんどん片付けを進めていくと、何か紫色のハンカチのような物を見つけコウさんに見せクシヤクシヤのまままで渡すわけにもいかず一度広げ、畳もうとした時にこれがハンカチではない事に気がついた。

「コウさんハンカチ落ちてましたよ?…ん?…これ下着…ハアアアア…」

「ちよつと二葉!!女の下着見てため息とかおかしくない!?普通は興奮とかするんじゃないの!ねえ!?また姉か?姉の下着で見慣れてると!?私には女の魅力がないと言いたいのか!?!」

下着を奪い取るやいなやキレられる。

「そうは言つてないですよ…ちゃんとすればコウさんはとても魅力的な女性になりますよつと片付け終わりました!」

「お疲れ様、ゴミ捨ては私とコウちゃんで行うから戻っていいわよ」

「分かりました、じゃあ後は任せました」

口を縛つたゴミ箱をブースの邪魔にならない所に置き、自分の席に

着きイヤホンを耳にはめ音楽を聞きながらスケッチブックを開き
キャラデザを始めた。

「えへへ聞いた？、私ちゃんとならば魅力的な女性だってえ」

「コ…コウちゃんはそのままでもいいの!!」

「な…何怒ってるのリン?」

「何でもないわよ!!」

好きな事をやっている時の時間の流れはとてつもなく速く感じて
しまう。

キャラデザを初めてからどのくらいの時間が過ぎたのか分からな
いが3人目のキャラを書き終わると肩を叩かれ、イヤホンを外し振り
返ろうとした時に俺の頬に人差し指がくい込んだ。

「ひっかかった!」

「にやにひゆるんですか…ゆんひゃん?」

「アハハごめんな!それよりうちとはじめと青葉ちゃんでお昼食べ
くけど二葉君も一緒にどうや?」

「お昼?...あ...もうこんな時間だったんですか...」

時計を見ると既に正午を過ぎていた。

「いいんですか俺も一緒でも?」

「うちは気にせえへんよ?」

「私も」

「私もです!」

「じゃあ俺も行きます、えっとひふみさんはお昼どうします?」

鞆を肩にかけ尋ねるとゆんさん達の視線がひふみさんを見つめ、オ
ロオロしながらこちらに体を向けた。

「えっと...私...」

「そう言えばうちひふみ先輩がお昼食べてるところ見た事ないなあ、一
緒に食べ行きませんか?」

「えっと...あ!」

「ん?」

返事に困っていたひふみさんの視線が俺の肩にかかった鞆のキ

ホルダーを見つめていた。

「二葉…君…それハリネズミ?…」

「はい、ニードルで造ったんですよ」

フェルトで出来たハリネズミのキーホルダーを取り外し、ひふみさんに手渡すと食い入る様にキーホルダーを見始めた。

「へえ二葉君器用なんやね」

「うわぁ可愛いですね!!」

「可愛い…二葉…君も…ハリ…ネズミ飼ってるの?」

「ありがとうございます!はい四葉って名前で一応そのキーホルダーのモデルの子なんですよ」

「私もお昼行く!!私もハリネズミ飼ってるの!だからハリネズミトクしよ!」

メッセのテンションで話すひふみさんを見た俺達4人は呆気にとられ、話すことも動く事も忘れただひふみさんを見ているだけだった。

そして我に返り顔を真っ赤に染めデスクに伏せてしまった。

「う…:恥ずか…:しい…」

「そんな事ないですよ?ひふみさん!」

「本当?…」

「はい!好きな事を話しているひふみさんもいいと思いますよ!良かったらキーホルダー差し上げますよ?」

「いいの?…」

「はいどうぞ!」

「ありがとうございます!」

ひふみさんの意外な表示を見せて貰ったお礼代わりにキーホルダーを譲るとひふみさんは早速スマホケースにつけ、嬉しそうに俺達に見せてくれた。

「ええなあ!めっちゃ可愛いですよ」

「二葉君凄いな!」

「私も何か作って欲しいなあ」

「時間あれば作るよ!じゃあひふみさんも一緒にお昼行きましょう」

この状況を作りだした張本人が何も知らず、不満をボヤきながら現れた。

「ねえコウちゃん！社員証の写真を撮ってって朝お願いしたよね？」

「あ…い…今から撮ってきまーす!!」

「ちよ！コウさんどこ行くんですか？」

「強く引つ張り過ぎですよ八神さん!!」

「まあまあすぐ分かるよ、リンくカメラ借りてくよ」

りんさんの威圧に堪らず逃げ出したコウさんに腕を引かれ、誰もいない壁の白い部屋まで連れて来られた。

「ここなら明るいから照明いらなから綺麗に撮れるでしょ？、んでどっちから写真とる？」

俺と青葉ちゃんは互いに顔を見合わせる。

「どうする青葉ちゃん？俺から撮ろうか？」

「それをお願いします…」

「分かった、コウさん俺からをお願いします」

「んじゃそこに立って…撮るよ…：はい終わり、次青葉そこに立って」

コウさんに指示された場所に立つと2く3回シャツター音がなり難なく俺の社員証の写真撮影が終わり、青葉ちゃんの番になった。

「ねえ服装は一応自由なだけどさあ…：なんで学生服なの？二葉は私服だよ？」

「やだなあスーツですよこれ、社会人の基本じゃないですか！いやあ服装選びに時間が掛かりそうなので…」

（み…見えない…）

「なら青葉ちゃん、これが正しいスーツの着方だよ」

ビジネススーツのリボンを解き、襟元を正す。

「あ…ありがとうございます…」

（うわツ…童顔だからスーツ似合わない…あれ？なんかいけない事をしている気がするんだけど…）

「まあいいや、撮るよ」

「青葉ちゃんくこつち向いて」

「ちよ!? 2人の心の声が聞こえましたよ!」

頬を膨らませ機嫌が悪くなるがカメラを向けた瞬間姿勢を正し、カメラ目線になる所を見るとやはり女の子だと言うのを実感する。

「よしツと2人ともお疲れ様〜後は完成を待つべし!!」

2人の写真を撮り終えオフィスまで送って貰った後、コウさんは社員証を作りオフィスから出ていった。

「これで扉の前で開くまで待たなくてすむね」

「本当あの時はどうなる事かと思いましたがよ…」

「扉の前でいい子に待っている青葉ちゃんは犬みたいで可愛いと思うなあ…人懐こい所も犬みたいだし、番犬青葉ちゃんいや、忠犬青葉ちゃんかな?」

「私犬ですか!?!…二葉さんってたまに意地悪な所ありますよね…」

「お! 2人ともお疲れさん〜一緒にお茶にせえへん?」

キャラ班のブース近くまで来ると、ゆんさんがティーポットを持って顔を出していた。

『お茶?』

ブースの中ではカラーボックスにテーブルクロスが敷かれ、その上にティーポットやキャラハンの人数分のティーカップが置かれていた。

「可愛いカップ! いただきます!」

「ありがとうございます! あ、クッキーありますけど食べます?」

『食べる!!』

鞆からクツキーの入った丸い缶を取り出し、即席のテーブルに置いた。

「どうぞ食べてください」

缶の蓋を開けひふみさん達が覗き込むと、一斉に目が輝きだした。

「凄い…可愛い…」

「色々な形がありますね!」

「うわぁ美味しそう!!」

「これ何処で買ったん?」

「これ俺の手作りなんですよ、雑貨屋で可愛い缶を見つけてね! クツ

キーを入れてみました〜」

「二葉君…器用…なんだね、美味しい…」

「ん!!ホンマや!」

「美味しい!!」

「凄い!美味しいですよ」

各々クツキーを食べ始め口に合うか不安で様子を覗っていると、全員の方に合った様で安心する。

「ありがとうございます!ゆんさんの淹れてくれた紅茶だって美味しいですよ!」

「ホンマ!ありがとうございます!」

今日の出勤だけでひふみさん達との距離が物凄く縮まった様に感じる。

「二葉く青葉お待たせく社員証出来たよ」

「お!ありがとうございます」

「ありがとうございます!なんか本当は入社した気分ですよ!」

「いや…もう入社してるから…と言うか休憩は確かに大事だけど終業前だつて事を忘れないでね?あ、後私にもクツキー頂戴」

「はいどうぞ」

「ありがとうございます!ん!美味しい!…それでダブルリーフは何処までですんだ?」

疲れた脳に糖分を補給している顔で、進捗状況を聞いてくる辺りはやはりプロだと言う事を実感させられる。

「えつと…私はここまでです」

「どれどれ…お!早いじゃん!!二葉は?」

参考書の付箋の挟まっている部分を開くと予想外に進んでいる事に驚いている

「4人のキャラデザが終わってます」

「4人も!?!」

今度はスケッチブックを開き俺の描いたキャラを真面目な顔つきでチェックするコウさんは、正直下着姿の時より魅力的だと感じてしまおう。

俺が描いた4人のキャラは若い神父に煤塗れの武器屋の娘、体格がやたらいいがドレスを着たオネイな男性の防具屋にオツドアイで無愛想な顔つきの女将で主人公が多く関わるであろう人物を主に描いてみた。

「いいね！特にオネイの防具屋は特に面白いよ！青葉ももう少ししたら仕事をふるから！2人とも頑張つて！」

『はい！』

「所で今作っているゲームって何なんですか？」

「そう言えば私も知らないです…」

「あれ…あ、うち言つてなかったわ!？」

「私も忘れてた…」

「え!?!知らないでこのキャラ描いてたの!?!…まあ私も言つてなかったけど…それでこのゲームの名前は「フェアリーズストーリー3」だよ」

『フェアリーズ…ストーリー3!?!…』

魔法もナイフも歓迎会もあるんだよ

もう何年も続け日課になった筋トレを終え、目覚まし時計がなる前に止める。

そして汗で濡れた上着をぬぎ上半身裸のままバスルームへ向いシャワーを浴び汗を流し、数日前の事を思い出す。

まさか俺がゲームに興味を持った「フェアリーズストーリー」の新作を僅かだが、作らせて貰っているなんて思いもしなかった。

まあその他諸々色々印象深い入社日初日で、チームのメンバーが俺以外女性と言う事や下着姿の女上司がいる会社だった。

「なんか…よくよく考えたら凄いやな…俺の職場…」

お湯で濡れ垂れた髪をかき上げ、オールバックにした状態でバスルームから出て髪を乾かす。

「やあ二葉君おはよう」

髪が乾きドライヤーのコンセントを抜くと、リビングから黒いリボンの付いた下着姿の姉が頭を掻きながら出てきた。

「おはよう、姉さんもシャワー浴びる？」

「ああ汗をかいてしまったからね、ん？二葉君また筋肉が付いたんじゃないか？」

「そうかな？」

左肘を曲げ力こぶを作り姉に見せると軽く叩いたり揉んだりして確かめているが、擦ったく姉の手から逃れる為距離を開けた。

「悪戯が過ぎたようだ…すまない、でも確かに筋肉は付いたようだね」
「擦っただけだから気にしないで、そう言う姉さんだって腹筋が綺麗に割れてるじゃないさ？」

下着姿故に見える腹部は女性では珍しく、綺麗にシックスパックに割れている。

「アハハそうなんだよ…少々鍛え過ぎたかもしれない…友人からはバルメなんてあだ名をつけられてしまったよ…」

「プツ…バルメツ…でも姉さんに合ってると思うよ？黒髪だし筋肉質だしナイフ戦得意だし」

「ウム…だから否定出来なかつたよ…そう言えば最近二葉君は銃を握ったかい？」

「忙しくて最近は…久々にサバゲーやりたいなあ…」

「私もだよ…会社のサバゲー仲間も忙しいようで全く出来ていないんだよ…二葉君の会社にはサバゲーをやっている人はいないのかい？」

「ん〜」
姉にそう言われキャラ班＋モーション班のメンバーを思い浮かべるが、皆サバゲーはやっていないと思う。

「やっている人は居ないんじゃないかな？」

「それは残念だね…休みが合ったら私の仲間と一緒にサバゲーをしないかい？」

「おお!!いいね!楽しみにしてるよ!それじゃ朝食を作ってくるよ」

「ああよろしく頼むよ」

「了解であります!少佐殿」

「ウム任せた!」

スチャ ― ((, ω) ― | ― | ― スチャ ― ((, ω)

「ごちそうさま〜美味しかったよ二葉君」

「お粗末さまでした、はい珈琲」

「ありがとう…ぷはあ〜」

朝食が載っていた食器を片付け砂糖とミルクたっぷり入った珈琲をテーブルに置くと、熱くない事をいい事に一気に飲み干した。

「ゆっくり飲みなよ姉さん…」

「そんなにゆっくりはしていられないんだ、実は早朝会議がある事を今思い出してね…もう出ないといけないんだ」

「早く急いで姉さん!!はいバック!!必要な書類はファイルに挟んであるよね?後マドレーヌ焼いたから食べてね」

残像が残りそうな早さで何時もより早い出勤の姉にバックやオヤツのマドレーヌを渡す。

「ありがとう、私のミスなのに二葉君を急かさせてしまって…すまないね」

「気にしなくていいよ」

何時もの様に姉を玄関まで見送る。

「じゃあ行って来るよ」

「うん行ってらっしゃい、気を付けてね」

「ああ二葉君も出勤時は気を付けるんだよ?」

子供の時の様に頭に手を載せ優しく撫ではじめるが、顔が熱くなり恥ずかしさのあまり下を向いてしまう。

「わかってるよお…もう子供扱いしないでよ…俺もう21だよ?…」

「姉の私にしたら君は何時までも可愛い弟だよ、さて弟の可愛い顔を見れたし行ってくるよ」

頭から手を離しニッコリと笑いながら手を振り会社に向かって行った。

「全く姉さんは…さて俺も準備しないとつとその前に」

エプロンを外しリビングに戻り、ソファの横にあるケージの布を捲った。

「おはよう四葉」

何もいない様に見えるケージに左手を入れ少し待つと、小さな木の家からハリネズミの四葉がノソノソと出てきて俺の左手を舐め始めた。

「アハハ撥つたいよ、はいゴハンだよ」

餌が載った小さな皿をケージの中に入れ、四葉の頭を軽く撫でた。

「おっと…そろそろ俺も出ないと、それじゃ行ってきます四葉」

「チュー」

挨拶をして再び布を被せ今度は自分の支度を始めた。

「さて忘れ物はないな…」

数分後、普段より多い荷物を持ちイーグルジャンプへ向った。

「見てみて青葉ちゃん!!ムーンレンジャーの新しいステッキだよ!!ボイスが20種類も録音されてるんだ!!」

出勤早々はじめさんが玩具の魔法のステッキを嬉しそうに見せつけて来た。

「へ…へ…凄いですね…」

(ムーンレンジャーってネネつちが見てたやつだよね?…私にあんまり知らないけど…)

「おはようさんくなんやはじめ、えらくテンション高いな?」

「おはようございますく本当だはじめさんテンション高い」

「おはよう…」

「あ、おはようございます!ゆん先輩、二葉さん、ひふみ先輩!」

出勤の途中でひふみさんとゆんさんに生き合い、一緒にオフィスマで来るとはじめさんが玩具のステッキを振り回してはしゃいでいた。

「あ!見てよムーンレンジャーの新しいステツ…:あ!」

振り向き勢いよくステッキを振った瞬間、はじめさんの手からステッキが抜けひふみさん目掛け飛んできた。

「ひふみ先輩危ない!!」

「え?…」

「間に合え!!」

ひふみさんに当たる前にバックから取り出したトレンチナイフでステッキを弾き、ひふみさんへの直撃を防ぐ事が出来た。

「ひふみさん大丈夫ですか?…って何で皆さん怯えていらつしやるんですか!」

先程よりも俺との距離を開け、顔を真っ青にし震えていた。

「二葉…君…な…何でナイフ?…」

「せ…せや…そないな物騒な物をなんで持つとるんや?」

ひふみさんとゆんさんの言葉に頷く青葉ちゃんにはじめさん。

(まさか皆さんこれ本物だと思っているのか…)

「あ…あのですね…これゴム製の玩具なんですよ?サバゲーで使うんですよ!!デスク周りに飾る為に持って来たんですよ」

刃の部分を曲げ偽物で危険ではない事を伝える。

「なんだあ偽物だったんですか」

「本当びっくりしたよ…」

「偽物…よかった…さつきは助けてくれてありがとう…」

「本物を持ち歩いていたら犯罪ですよ…どういたしましたよ…ん?」

「ニヤア〜」

席に付くためキャスター付きの椅子を引くと、既に先客が座っている、又は寝転んでいた。

「ニヤンコだあ」

荷物を置き小型犬くらいに肥えた猫を抱きかかえる。

「君は何処からきて誰のニヤンコなんだい？人懐こいから誰かのニヤンコだと思うけど…」

「可愛い猫ちゃんですね！」

「おや？こんな所にいたのかもずく」

『うわ!?!』

俺と青葉ちゃんの間に見知らぬ赤い眼鏡をかけた女性が立っていた。

「柔らかい女の子の腕に抱かれるのもいいが…たまには筋肉質でたくましい男子の腕に抱かれてみるのもいいかも知れないね」

「あ、葉月さんおはようございます」

「ございます」

「おはようございます…」

ひふみさん達の顔見知りと言う事は少なくとも部外者ではないようだ。

「ああおはよう、君が新しくうちに来た社員の高坂二葉君に涼風青葉君だね？」

「はい…」

「そうです…」

「私はディレクター兼二葉君がたくましい腕で抱き上げている猫のもずくの飼い主の葉月しずくだよ」

「ディレクターって事はここが一番偉い…」

「こんな所に居たんですか葉月さん!!」

俺の言いかけた言葉を遮るように大きな声を出したと思われる色黒の女性が、明らかに不機嫌な顔をしてキャラ班のブースに入ってきた。

「う…うみこ君…」

「さあ行きますよ!!これから会議なんですから」

「わ…分かったから!!引つ張らないで!」ディレクターである筈のしずくさんの腕を掴み早歩きでオフィスから出ていったが、ペットであるもずくは俺が抱き上げられたままだった。

「ディレクターって実は偉くないのかな?てかもずくちゃんどうしよう?」

「さ…さあどうなんでしょう?…とりあえず預かっておきましょうか?」

「だね、もずくちゃんしずくさんが戻って来るまで俺の膝の上でお留守番してよっか」

「ニヤーン」

本人?本猫?の了承をもらい、椅子に座りもずくを膝に載せ銃を飾り仕事を始めた。

♪ (^ _ ^) ♪ (^ _ ^) ♪ (^ _ ^) ♪ (^ _ ^) ♪

「ん〜…」

「…」

仕事を始めてから数時間後。

悩みがこもった唸り声を何度もあげ、全く作業が進んでいないと思われる青葉ちゃんに誰も声をかけないと言う事は、きつと彼女から出ている深刻過ぎるオーラのせいだ。声をかけずらくなっているようだ。

(今青葉ちゃんがやってる作業ってコウさんが描いたキャラをモデリングして3Dキャラに残す作業だよな…凄く悩んでいる様だけど…)

(物凄く声をかけずらい…)

「あ…あの…二葉さん」

「ん?え!?な…何?青葉ちゃん」

話しづらいオーラを出していた本人から声をかけられて驚かない人間がいるだろうか?

答えは多分否。少なくとも俺は驚く。

「あの可愛いキャラってどうしたら出来ますか?」

「可愛いキャラの作り方?…」

俺の膝の上に寝ているもずくちゃんを床に寝かせ、青葉ちゃんの隣

に行き状況を把握する。

「そう言う事か…説明より実際に見てもらおうかな」

自分のデスクの棚からスケッチブックを取り出し、白紙のページに少女の絵を描き青葉ちゃんに見せる。

「ねえ青葉ちゃんこの絵どう思う？」

「えっと…可愛いです！」

「アハハありがとう、それでどの辺が可愛いかな？」

「えっと…えっと…絵が…可愛いです…」

「そうなるよね〜それじゃ…これは？」

先程の絵にサイドテールや雪の結晶の形のヘアピンを描きたし、再び青葉ちゃんに見せる。

「サイドテールやヘアピンも可愛い…あ!!ありがとうございます！」

「どういたしまして♪」

悩みを無事解決し、またもずくちゃんを膝に載せ仕事の続きを始める。

「少し遅くなっちゃいましたが、高坂二葉君と涼風青葉ちゃんの新人歓迎会を行います!乾杯!!」

『乾杯い!!』

リンさんの乾杯の音頭の後には皆でグラスを合わせ乾杯をし、俺と青葉ちゃんの新人歓迎会が始まった。

「今日は会社のおごりだから皆好きだけ飲んで食べてね!!」

『はい』

「と言う事で肉喰うぜ!!」

「あ!そんなに肉を持ってかないで下さいよ!八神さん!!」

一足先に鍋の肉をさらっていくコウさんに続き、はじめさん達も鍋に手をつけ始める。

「そう言えば青葉ちゃん一人目のキャラOK貰えたんだってね、おめでとー!」

「二葉さんのアドバイスのお陰ですよ!相談してなかったらきつとまだOK貰えませんでしたよ…」

「俺はただやり方を教えただけで、答えを出したのは青葉ちゃんの力だよ」

「そうだと嬉しいです…」

酒を飲みつつ肴をつまみ、左隣に座る青葉ちゃんの頭を撫でる。

「なぐに二人だけで話しとるんやあ」

歓迎会が始まってからまだ時間が経っていないと言うのにほろ酔い状態になったゆんさんが顔を近づけ、青葉ちゃんとの会話に乱入してきた。

「ゆんさん顔近いです…」

「もう酔ってるんですか!?!」

「んゝまだ酔つとらんよゝ青葉ちゃんはまだ未成年だからお酒飲めへんけど二葉君はうちと同じ21やろ? お酒のんでる?」

「ち…ちゃんと飲んでますよ?」

「んゝそれホンマにお酒か?」

疑うゆんさんに酒の入ったグラスを見せるといきなりグラスを奪われ、中身を一気に飲んでしまった。

「あ!?!ゆんさんそれ度数高いですよ!?!」

「んく…んく…うちはもう大人や!こんくらい飲め…」

「ちよ!?!ゆんさん!!」

お酒を飲み干した瞬間ゆんさんの顔が一気に赤くなり、フラフラしながら俺の膝に倒れてしまった。

「スースー…」

「寝ているだけみたいですね…」

「だね…びつくりしたよ…」

「二葉は何%の飲んだの?」

「確か39%」

「39!?!結構高いの飲んでるね!!意外と二葉強いんだなあ」

「青葉ちゃん!!後輩は上司にお酒をつぐものれす!!」

ダンつと中身を飲みほされたグラスをテーブルに強めに置き、呂律が回っていないリンさんが反対の手に持ったビール瓶を青葉ちゃんに差し出した。

「うわ…リンも酔ってるよ…」

「えつと…上手くつげるかな…」

「…青葉ちゃんビールをつぐ時は泡を3、ビールを7を目安にするといよいよ…」

「泡を3でビールを7ですね！ありがとうございますー！」

「いえいえくつと…皆さん俺注文しますけど、序に何か頼みましょうか？」

「私はまだビールあるから大丈夫」

「ありがとうございます、私も大丈夫だよ」

「あ…あの…二葉…君…注文…お願ひします…」

「もりたけぞうですね？飲み方がストレートにロック、炭酸割がありますけどどうします？」

「えつと…そのまま…で」

「分かりました！すみませんー注文お願ひします」

「ありがとうございます」

「はい、ただ今！」

クウーツ!!” (*∨△∨) ○ (酒) ” クウーツ!!” (*∨△∨) ○

(酒) ”

「ぶつちやけ話ししよーぜえ」

『え?』

新人歓迎会開始数時間後、酔ったコウさんが飲み会の王道のネタを持ち出した。

「なあ二葉、この中で彼女にするなら誰え？」

「んく正直選べないですね、皆さん魅力的な女性ですし」

「えへへ…魅力」

「八神さんが純粹に照れてる…と言うかりんさんまでダウンしたよ…」

「あのすいません…もう時期閉店時間となりますので…」

「もうそんな時間かあ、二次会来る人いる？」

二次会はしみじみと

「二次会かぁ…どうしようかな…ん？」

明日は俺や姉の会社は休みで朝食を作る心配はなく、まだ飲み足りない事もあり参加しようとした時にひふみさんに袖を引かれた。

「ひふみさんどうしたんですか？」

「えつと…二葉…君…まだお酒…飲める？」

「まだまだ飲めますけど？」

「じ…じゃあ…日本酒…好き？」

「最近飲んでないけど好きですよ？」

「辛口とか…何か好みある？」

「お酒は全般大好きですよ？」

「…!!」

「…？」

袖を掴んだままモジモジしているひふみさん。

人と話す事が苦手な彼女が自ら俺に話をかけてくるのはきつと大事な内容と思い、ここはあえてひふみさんの次の言葉を待った。

「そ…それじゃ…少し歩くけど…日本酒専門のお店があるんだけど…2人で飲みにはいかない？…また…ハリネズミトーク…したいし…どうかな？…」

「いいですね！行きましょう、早速コウさんに報告を…」

「待って!!」

「え？」

少し離れたコウさんに別行動をとる事を伝えるに行こうとした時、腕にしがみついて報告を止められてしまった。

「あの…ひふみさん？」

「あの…ね…酔ったコウちゃんとリンちゃんは…面倒くさいから…こっそり…抜け出そう…」

「大丈夫なんですか？…そんな事して」

「うん！大丈夫…何度も…やってるから!!」

(常習犯だったかぁ…)

「なら静かに行きましようか…」

「うん!!案内するからついて来て!」

ひふみさんと共にコウさん達に気づかれぬ様に、ゆっくり静かにその場から立ち去った。

「二葉さんとひふみさんは…つて!?もういない!!」

「また逃げられた…今度は二葉まで…仕方ない…はじめはゆんを送ったから3人で飲み行くか…」

「そうれ〜二次会に行くのれす!」

「リンさん…凄くノリノリだ…」

??・・ ⊠ ??*? ??*? ?? ???・ ⊠ ??*? ??*?

?? ??? ⊠ ??*? ??*? ?? ?

「着いた…ここ…だよ!」

「うわあ…凄いですね」

酒蔵を改装した古風な外装だが、店の中はカウンター席など現代風の造りになっている。

「いらつしやいませ〜空いているお席にどうぞ!」

「二葉君…何処に座る?…」

「そうですねえ」

他のお客は多いものの決して空席がない訳ではないため、自分達が座りたい空席を探す。

「あそこのカウンター席でいいですか?」

俺が提案したのはカウンター席の端の方で、カウンター越しに酒瓶が飾られている棚が眺められる席だ。

「飲みながら酒瓶を眺めるのもいいかなって思ってたんですが…アハハ、すいません…つまらないですよね?…」

「ううん…そんな事ないよ?…私もあの席よく座るよ…お酒の瓶見ながら飲むの…私も好きだから」

「よかった…じゃあ座りましようか」

「うん!」

木製の椅子に座りお品書きを開き、注文を選びはじめる。

「酒も肴も凄い品揃えで迷っちゃいますねえ、しかも値段が安いですし」

「そうなの！店長さんの知り合いの酒蔵から直接お酒を仕入れてるから安いんだって！後お肉屋さんや漁師さん、農家にも知り合いがいるからおつまみも安いんだって！」

「へ〜ひふみさん詳しいんですね？」

「何度も来てるから！」

酒が入っているからか、いつの間にかメッセモードのひふみさんになっっていた。

「迷ってるなら私のオススメがあるんだけど…それにする？」

「はい、それをお願いします！」

「いらつしやいひふみちゃん!!あら、男の人と来るなんて珍しいわね？あ、まさか彼氏さん？」

注文が決まった時に丁度よく膨よかな女性の店員さんが、とても嬉しい勘違いをしながらお絞りとお冷を持ってきてくれた。

「か…彼氏!？」

「ち!?!:違うよ!?!同じ職場で後輩の二葉君だよ!!」

「そうなのかい?…:2人ともお似合いだし仲が良かったからってつきり付き合ってるのかと思ったよ、でも二葉君は満更でもないみたいだけど?。」

「え?…:」

「ひふみさんの彼氏…:かあ」

「二葉君どうかしたの?。」

ひふみさんに肩を揺さぶられ我に返る。

「い…いや何でもないですよ!はじめまして、高坂二葉です!」

(言えない…:ひふみさんと付き合っていた妄想をしていたなんて…)

「あたしの事は気軽にトモさんって呼んでちょうだい!」

「分かりました!トモさん!」

「アハハ、いいねえ若い子は元気があって!それでひふみちゃんはいつものやつかい?。」

「うん、後二葉君も私と同じやつでお願いします」

「あいよ！ちよつと待っててね」

トモさんはお絞りとお冷を置き、片腕を上げ厨房の中に入っていた。

「…」

会社ではあまり見る事が出来ない色々変わる表情や、テンポよく交わされる会話をするひふみさんを見ていると何故か虚しさを感じていた。

「二葉君どうしたの？」

「え？…ど…どうかしましたか!?!」

「何かブーツとしてたから…やっぱり私が勝手に決めちゃったのが嫌だった？」

「い…いえ!!違うんです！そんな事ないです！…ただ…」

「ただ？…」

「…トモさんとの仲が凄く良いんだなと思っただけですよ！」

本音を隠しその場しのぎの適当な言葉を紡いだのは、何故あんなふうに感じたのか理解るまで言わない方がいいと咄嗟に思ったからだ。

「長い付き合いではあるね！私がイーグルジャンプに務め始めた時から
の行きつけだから、会社の皆も来るんだよ！何だかトモさんが2人目
のお母さんって感じがするよ！愚痴とか色の聞いて貰ったからかな
？尚更そう感じるんだあ」

「確かに！肝っ玉母さんって感じがします！」

「あくそうだね！その言葉があってるよ！」

「お待ちどうさま〜随分盛り上がってるじゃないか！」

ひふみさんが注文してくれたオススメが出来上がったらしく、大きなおぼんを持ったトモさんが笑顔でカウンターに並べていく。

「この香り…鯖酒ですか？」

「当たり前！」

「ひふみちゃんは何時もこればかり飲むのよ〜」

軽く炙った河豚の鰭と日本酒が入ったちよこと、徳利、魚介類の刺身が盛られた皿等でカウンターが華やかになった。

「すいません〜こっち注文お願いしま〜す」

「あいよ！今行くからちよつと待ってて、んじやゆつくりしてつてね」

『ありがとうございます！』

トモさんは片手を上げ、注文を取りに別の席に向かっていった。

「飲もう二葉君！」

「ですね！いただきます！」

鱈酒を少し口に含むと鱈酒独特の風味が口の中全体に広がり、日本酒がゆつくり体に染み込んでいく。

「凄く美味しいです！」

「良かったあ」

その後肴をつまみつつ色々な話をしていると、ひふみさんが好きなハリネズミの話題になった。

「あ、そう言えば！見てくださいひふみさん！」

ポケットからスマホを取り出し、アルバムからティーカップに入った四葉の写真を表示しひふみさんに見せる。

「これが四葉ちゃんかあ、ティーカップにはいつてる可愛い」

「ああ！やっぱりひふみさんと二葉君だ！」

「八神さんと二次会行かんかったんですかあ？」

ハリネズミトークをしていると、後ろから聞き覚えのある声で話しかけられた。

「あれ？はじめさんにゆんさん!? どうしてここに？てかゆんさん起きたんですね？」

「そうなんだよ…急に起きたと思ったらまだ飲み足りんからどつかで飲みたい！って言うから仕方なく店を探したら、ひふみさんと二葉君っぽい人がいたから来てみたんだよ」

「まあゆんさんは2杯しか飲んでないですもんね…」

「せやからひふみ先輩と二葉君もおうちに付き合ってくれへん？」

「俺は別に構わないですけど?…」

「うん！いいよ！」

誘ってくれたひふみさんに視線を向けるとひふみさんは笑顔で同意し、ゆんさんとはじめさんと一緒に飲むことになった。

「おや？ゆんちゃんにはじめちゃんじゃないか！」

「トモさん!!お久しぶりです〜」

「こんぼんは！確か去年の忘年会いらいやったっけ?…」

大量の食器がのったおぼんを片手で軽々と持ったトモさんが、ゆんさん達に気づきお客を避けながらゆんさんとはじめさんの間に入つた。

「人数が増えたから座敷使うかい？」

「確かに4人でカウンター席はキツイですね…どうしますひふみさん？」

「じゃあ使わせて貰うね！」

「んじゃ空いてる所使っていいからね！この食器を片付けたら注文取りに行くから待っててね！」

『はい！』

休日

「ゆん姉ちゃん起きて！～あさやで！」

(ん？れんが起こしに来てくれたんか…)

弟のれんに体を揺さぶられ半分目が覚めた状態になったが、今日が土曜日で休日。二度寝をする為目は閉じたままにしてある。

「朝ごはん出来たし、今日はムーンレンジャーの映画を見に連れてつてくれるって言うたやん!!」

(行く言うたんは10時からやろ、朝ごはんは…眠いしダイエットにもなるから食べんとこ…ごめんな作ってくれたんにおかん…)

「お姉ちゃん早く起きて!!朝ごはん食べたら映画見に行く前にあ～そん～で!!」

「ん～!!」

布団を引き剥がそうと思いい切り引つ張ってくるが、ゆんも負けじと布団にしがみつく。

「う…ううっ…お姉ちゃんが起きてくれへん…うわーんお姉ちゃんが嘘ついたア…うわああーん、映画見に連れてつてくれへーん」

(アカン!?泣かしてもうた!!…仕方あらへん…起きるか…)

「ううっ…頭痛い…分かった!起きるから泣き止んで!」

弟に泣かれてしまい二度寝が出来ないと判断し、仕方なく折れ起きる事にした。

「ほんまに?…朝ごはん食べ終わったら遊んでくれる?」

「ええよ遊んだるわ、布団畳んだらすぐ行くから先に戻つといて…」

「うん!分かった!!」

泣き止んだれんは、駆け足でゆんの部屋から出ていった。

「ほんま元気やな…さて…起きるか…はあ眠たい…」

半分夢心地で二日酔いのまま布団から這いで二度寝に後ろ髪を引かれながら布団を畳み、部屋着のジャージのまま家族が集まっている居間に向かった。

「おはようさん～、ん～ええ香りやあ」

『おはよう!』

「あ、おはようございます」

家族と挨拶を交わし、食欲をそそる香りがする朝食が並ぶテーブルに座った。

「ゆんさん、ご飯はどのくらい食べます？」

「ん〜普通う」

「このくらいでいいですか？」

目の前に白米ののった茶碗を置かれ、量を確認する。

「このくらでええよお、おおきにいい」

「それじゃあ皆揃ったし、いただきます!!」

『いただきます!!』

「まーす」

何時もの様に皆で手を合わせ、各々朝食に手をつけはじめた。

「ズズウ…あくこの味噌汁いつもより美味しいわあ、具は…アサリかあ?」

「ありがとうございます!それは蛸ですよ、アルコールを分解したり肝臓の働きを高めてくれるんです」

「へー、二日酔い気味やから助かるわあ」

「あ、みう!二葉兄ちゃんの膝の上に座ってたべるのずるい!!」

「別にずるくないやん!!れんは昨日二葉お兄ちゃんと同じ布団で寝たからおあいこやー!」

「アハハれん君もおいで、俺大きいから2人とも乗れるよ」

「わーい!!」

「全く…2人共二葉君に迷惑かけたらあかんよ!…でもほんま助かったわ、早起きして朝ごはん作ってくれて」

「一宿一飯の恩義ですから気にしないでください」

「枝豆とほうれん草の胡麻和えも美味しいわあ」

「枝豆にもアルコールを分解する成分が含まれているんですよ」

「へー」

「アハハ朝が弱いゆんとは大違いやな!あ、二葉君ポン酢取ってもらってええ?」

「はいどうぞ」

「おおきに」

「おとん、しらすおろしにあんまりポン酢かけたらあかんよ…ああ…ほんま味噌汁美味しいわあ…二葉君味噌汁のおか…二葉…君？」

「はい何ですか？」

徐々に脳が活動し始めると、ある疑問に気がついた。

廻らない頭とやたら溶け込んでいるせいで今まで気が付かなかったが、普段絶対にいない人物が自分の右側に座り姉弟達を膝に載せ朝食を食べている。

「な…な…何で!!二葉君が家に居るん!?!」

「え!?今更ですか!!普通に会話してたじゃないですか…」

「二日酔いで頭回ってなかったし、溶け込み過ぎて気づかなかったんや!!」

左手をテーブルが壊れそうな勢いでバン!と叩き、人差し指を立てた右手で効果音の「ビシッ!!」が聞こえそうな感じで指を指された。

「じゃあ昨日の事も覚えとらんのか？」

「二次会やった所までは覚えとる…まさかうち何かやらかしたんか…おとん？」

「酔い潰れたゆんを二葉君が家まで送って来てくれたんやで?それで終電逃してしもうたから家に泊まってもらったんや」

簡単な説明をしてまた味噌汁を飲むおとんから二葉君の方に急いで向き、顔の位置で両手を合わせ謝罪をする。

「ごめんなあ二葉君!!、うちのせいで終電逃させてしもうたり、朝ご飯作らせてしもうたり…着替えとか大丈夫なんか?」

「気にしないで下さい、はじめさん達を送ったのに時間を気にしなかった俺が悪いんですよ…着替えは会社に泊まる時に用に持ってたけど、結局着なかつた服を持って帰る時だったので大丈夫です!」
「うう…ほんまごめんな…せつかくの休日に…朝ごはん食べたら帰ってゆっくり体休めてな」

『駄目!!』

「へ?」

謝罪中に朝食を食べ終えたらしいれんとみうに否定をされてし

まった。

「ご飯たべたら二葉兄ちゃんと一緒に遊ぶって約束したんや！」

「そうや！後お兄ちゃんも一緒に映画見る約束もしたんや！」

「え…ええ!?二葉君それ本当なんか？」

「アハハ…2人が起きた時に…純粋な目でお願いされたので断れなくて」

と言いながられんとみうの頭を慣れた手つきで撫でる。

「ほんま…ごめんな…」

「いえいえ」

「ゆん姉ちゃん早く早く!!」

「映画行こく行こく!!」

「ちよ!?待ってれん!みう!車来たら危ないから飛び出したらあかんよ!!」

朝食を食べ終え様々な家事を済ませ時間まで遊んだ後、先に出かけた両親の代わりに玄関の戸締りをしようとした時にれんとみうが勢い良く飛び出してしまった。

「れん君!みうちちゃん!危ないから俺と手を繋ごう!」

「わくい!!二葉兄ちゃんと手繋ぐ!」

「みうも!みうも!二葉お兄ちゃんとおてて繋ぐ!!」

まるで犬が投げられたボールをとって飼い主の元に持ってくる様にれんとみうが二葉の元へいき、差し出された両手を握る。

(なんや…2人共二葉君の言う事はちゃんと聞きおつて…二葉君も慣れとるし…)

「ゆん姉ちゃん早く早くう」

「お姉ちゃん早くしないとうちとれんと二葉お兄ちゃんだけで行っちゃうよ!!」

「ああもう分かった!今行くから!!」

鍵が掛かった事を確認し、3人の元へ走って向かった。

(—ω—) 貧乳は (—ω—) ステータスだ!

「ハア…」

幾つかの映画を見終え、16時の遅めの昼食？をとるためファストフード店に入店し、各々注文したメニューをトレーに載せ席につくとゆんさんが深いため息をはいた。

「ゆんさんどうしたんですか？」

「ちよつとな…映画館でライト配つてたやろ？」

「ああ、ヒロインがピンチになったら振ってパワーアップさせる事が出来るライトですか？」

「うん…それな普通は子供達にあげるやつなんやけど…配つてたお姉さんがうちにもくれたんや…」

「あゝ貰つてましたね…」

ゆんさんのバックの持ち手に付けられたライトを見つめ、映画館の時の事を思い出す。

「それってうちが子供っぽい言う事なんかな？…チケット買う時大人1枚に子供3枚ですね？…って…随分歳が離れた妹さん達がいるんですね？…って言われたし…この服装が駄目なんかな？」

「プツ!!ハハハッ」

堪えていたがチケットの話をされてしまい、我慢の限界が来てしまい笑ってしまった。

「うううう…二葉君ひどい!!笑つたな！」

「す…すいません…つい…」

「もお…結構気にしてるのに酷いわ…」

「アハハでも気にする事ないとおもいますよ？今の服もジャージ姿のゆんさんも可愛いですよ？」

「えええ!!」

みるみるうちにゆんさんの顔が赤くなっていく。

「で…でも会社の皆には恥ずかしいから秘密にしてな…」

「分かりました！」

「ねえゆん姉ちゃん」

「どないした？れん、みう」

「あそこで遊んで来てええ？」

2人が指を指さしたのは、子供達が無料で遊べるキッズスペースだった。

「ええけど2人共食べ終わったんか？」

『うん！食べ終わった！』

「じゃあ怪我せえへんように気をつけてな」

『わーい!!』

オマケが貰えるセットに付いてきた玩具を持ち、2人共元気良くキッズスペースに向かって行った。

「あ!!やっぱりゆんさんだ！」

「ん？」

「あ！琴葉ちゃん！」

友達と入店してゆんさんと親しそうに話す黒髪のポニーテールの少女の顔に何処か見覚えを感じていると、ゆんさんがその少女の自己紹介をしてくれた。

「二葉君、この子はトモさんの娘さんの佐伯琴葉ちゃん」

「こんにちは！」

(あ！確かに目とかトモさんにそっくり)

「こんにちは、俺はゆんさんと同じイーグルジャンプで働いている高坂二葉だよ、よろしくね！」

「ええ!!?二葉さんもイーグルジャンプで働いているんですか!!」

「うん、今月入社したばかりだけどね」

「そうなんですか！私今高校3年で来年にイーグルジャンプに入社出来るように色々勉強しているんですよ！」

「へー今高3かあ、妹と同一歳だしもしかしたら妹と一緒に入社するのなあ」

「え!!?二葉君妹いたの？」

「はい、三葉（みつは）って言ってイーグルジャンプに入社するって言ってるんですよ」

「じゃあ私も二葉さんの妹さんと同期になれる様に頑張らなくちゃ!!とすいません友達を待たせているので失礼しますね！」

元気良く頭を下げ、友達が注文を決めている注文カウンターに戻っ

ていった。

「来年が楽しみやなあ」

「ですね!、どうします?そろそろ帰りますか?」

「そうやな、晩御飯の支度もしないとやし…二葉君はまた…家に泊まる…」

「流石に迷惑だと思いますし、姉が心配なのでゆんさん達を送ってたら帰りますよ」

「…別に迷惑やなんて思わんし…泊まってくれても構わんのやけど…」

「すいません…よく聞こえなかったのもう一度言っつて貰っていいですか?」

「い…いや!!なんでもあらへんよ!?!れん、みう!!もう帰るで!」

『はーい!』

急に小声になりゆんさんの言葉を拾うことが出来なくなってしまう、もう一度言っつて貰おうと下がまた赤面し話を逸らされてしまった。

「何でもないなら…いいんですが…じゃあ帰りましようか」

休日のヴァルキュリア

「よいしょっと…ハア…やっぱり姉さんを1人にさせない方がいいな…」

市で指定された割れた皿や焦げた鍋が大量に入ったゴミ袋をゴミ捨て場に置き、呆れはてたため息を吐く序についついボヤいてしまった。

事の発端、つまりこの大量の不燃ゴミを生産したのは俺の姉、高坂一葉だ。

新人歓迎の二次会でゆんさん達を送り終電を逃してしまい、ゆんさんの家に泊めて貰った短い間に部屋がまるで天変地異がおきたかのように散らかっていた。

姉と2人暮らしを始めてから度々部屋を空けその都度部屋を散らかさしていたが、今回は 前例を遥かに超えていた。

「こりややっぱり何か対策を建てないとだな…」

鳥避けのネットを被せ、手に付いた土埃をはらい部屋に帰った。

「ただいまあ」

「お…おかえり…二葉君…」

玄関で靴を脱ぎ上がるとリビングの入口から申し訳な誘うな顔をした姉さんが、廊下に顔だけだし俺の顔色をみている。

「姉さん昨日の事は気にしなくていいから…いつも通りにしてよ…調子くるうから…」

「ほ…本当にかい？もう怒ってないかい？あの朝食を食べてもいいのかい？…」

「本当だよ、と言うか俺そもそも怒ってないよ…呆れはしたけど…てかまだ食べてなかったの!？」

「部屋を散らかした罰で見ているだけで、食べてはいけなのかと…」
「そんな事する訳ないでしょう…早く食べちゃって」

申し訳なさそうな顔をしている姉に近寄り、苦笑いを浮かべ鼻を摘んだ。

「なに、するん、だ二葉君…そう、言えばスマホにメールがきていたようだよ？」

「メールって誰からだろ？…え？」

姉と一緒にリビングに入りテーブルに置かれたスマホのスリープモードを解き、メールの受信ホルダーを確認すると意外な人物から送信されていた。

「コウさんからだ…一体どうしたんだろ？」

「誰からだい？」

「職場の上司だよ、えつとなになに…」

朝食を食べる姉の向かい側に座り、メール内容を確認する。

「部屋に来て」

「へ？」

「内容は？」

「部屋に来てだって」

「仕事の事で何か大切な用があるんじゃないか？、ほら私もいる訳だから作っているゲームの内容が盛れない様に、と言う事じゃないかな？会社の皆は二葉君に姉がいる事は知っているのだから？」

「伝えてあるよ、そう言う意味なのかな？」

（まあ下着姿で部屋をうろつくだらしない姉と紹介しているけど…）

もう一度シンプルなメール内容を見ると、一つの疑問に気がついた。

「部屋に来てって言われても…俺コウさんが住んでいる場所知らないんだけど？」

「でも、二葉君を招くと言う事は既に伝えてあるんじゃないかな？」

「ん…俺が忘れていただけなのかな…もしかして新人歓迎の時に…駄目だ思い出せない…かと言って本人に聞くのも失礼だしなあ…そうだ！」

コウさんと仲が良く、尚且つ同期である人物が思い浮かんだ。

「きつとりんさんなら住んでいる場所を知っているはず！」

解決の糸口を見つけ、早速りんさん宛に文字を紡いだ。

「おはようございます、高坂二葉です。」

朝早くに申し訳ないのですが、コウさんのお住まいの住所を教えてくださいえないでしょうか？」

「こんなモンかな？」

誤字脱字が無いことを確認し、送信ボタンを押した。

「後はりんさんからの返事を待つだけ、姉さん食器洗うから貸し…」

綺麗に空いた食器を片付けようとした時に、メールの受信音が鳴った。ディスプレイには登録名のAD 遠山りんさんの文字。

「返信はやッ!？」

とりあえず食器をシンクに置き、りんさんからのメールを確認する。

「おはようございます。どうして知りたいのかしら？何か用事があるのなら私が伝えておくけど？」

「りんさんから伝えるも何も…俺コウさんの連絡先知ってるんだけどなあ…」

「今朝コウさんに部屋に来てと言うメールを貰ったのですが、住所を分からないので…それでりんさんに聞いてみたんですが…多分仕事の話だと思います。」

「送信つと…さあて洗い物お!？」

送信してまた数秒後にりんさんから返事が返ってきた。

「分かったわ、住所と部屋の番号を教えるわ」

「ありがとうございます。」

送信し今度こそ洗い物を片付けた。

「ん〜ツ…もう朝かあ」

カーテンの隙間から漏れた光が丁度目に当たり、眩しさを覚ました。

「眠い…お腹空いた…」

新人歓迎の二次会から帰ってから何も食べずにいた為、お腹が空腹だと脳に警告している。

無論自分では料理を作らない故、今の状況を打破する事が出来ない。

「りんに来てもらって、何か作って貰おう…」

枕に顔を埋め手探りでスマホを探し出し、りん宛にメールを打つ。

「部屋に来て」

「りんならこれで伝わるだろ…送信つと…」

メールを送信し、再び眠りについた。

ピンポーン

「ん…りんがきたかな？」

インターフォンとメール受信のバイブレーションで、浅い眠りから目を覚ました。

一応メールを見ると、今着きました。と短い内容が届いていた。

「よいしょつと、お腹空いたよお二次会終わってから何も食べてない…」

ベッドから立ち上がり玄関のドアを開けるとそこにはりんの姿はなく、代わりに黒いシャツを来た誰かの胸元が目の前に広がっていた。

「へ？だ…誰!？」

「ちょ!!呼んでおいて誰?は酷いんじゃないです!？」

「え?その声は二葉あ!?!呼んでおいてってどう言う事?」

「コウさんがメールで、部屋に来てって送ったんじゃないですか!!それですりんさんに住所とか聞いて来たんですよ?」

「メ…メール…まさか!?!二葉ちよつと上がって待ってて!」

「あ…はい、お邪魔します」

二葉をとりあえず部屋に招きスマホのメール送信フォルダーを確認すると、送信履歴にはりんに送ったつもりだった内容が二葉のアドレスに送信されていた。

「ごめん二葉!さつき起きたから寝ぼけてりんと間違えてメール送っちゃってた…」

「寝ぼけてメールを送り間違えるって…俺で良ければりんさんの代わりにありますけどどうします?」

「ご飯作って貰おうとしたただけだから別にいいよ…インスタント食品たべるから」

「ご飯なら俺が作ってあげますよ！何が食べたいですか？あ、冷蔵庫開けますね」

「ああ!!ちよつと待って二葉!!」

「え…」

袖を捲り材料を確認するため冷蔵庫を開けると中身は空っぽで、その光景に言葉を失ってしまった。

「…」

「何だよ!!言いたい事あるなら言えればいいじゃん！仕方ないだろ？食材はりんが持ってきてきて料理を作ってくれるんだから！はいはい私は女子力の欠片もないですよ！」

「そこまで言っていないですよ…材料ないなら買いに行きましょう」

グズる子供をあやす様にコウさんの頭を撫で、落ち着かせる。

「うん…分かった…」

「何かリクエストはありますか？」

「ん…ラザニア食べたいなあ、前にテレビで紹介して食べたいって思ってたんだけど…」

「それってゴゴナンデスの並んでも絶対なんとしても食べたいレストランでやってたやつですよね！、任せて下さい！飛びつきり美味しいラザニアを作りますよ！早速着替えて行きましょう」

「へ？」

「え？」

「この格好のままじゃ駄目？…」

コウさんの部屋着は女性物のタンクトップにやたら丈が短いルームウェアのショートパンツのみで、家で過ごすには問題ないが一目に出すのは気が引けてしまう。

「だってそれ部屋着ですよね？…隠す部位より出ている部位の方が多い様な格好で出かけるんですか？」

「出かける時はこれに薄いパーカー羽織るけど…それだけじゃ駄目？…私ファッションとかよく分からないんだよね」

「分かりました、コウさんクローゼットは何処ですか？服も俺が選びますよ」

「あゝあゝあ 分かった！ちゃんとした服着るから！」

何を着たらいいか分からないコウさんの代わりに服を選びに部屋の奥に行こうとした途端、シャツを掴まれ全力で引っ張られ部屋の奥への侵入を阻止されてしまった。

「じゃあここで待つてますんで着替えて来て下さい」

「分かったよ！またったく…でも二葉に任せたら絶対ヒラヒラした服とか選びそうだし…そもそもりんが沢山服を持ってくるから…」

ブツクサと不満をボヤきながら俺を置いて、部屋の奥へ行きドアをしめ着替えにいった。

「待てよ…逆に私が着なさそうな服を着て二葉に似合わない事を分かれば着なくてすむ！よーし！」

自信に満ちた笑顔でクローゼットを開け、りんから貰った服で絶対に着たくないと思っただ服を選び、着替えた。

「お待たせ二葉あー！」

二葉の似合わなさで驚く顔を思い浮かべドアを開けると、自分を見るやいなや予想通り固まっていた。

(どうだ！りんに貰ったピンクのカーディガンにフリルがついた白いミニスカワンピースが私に似合うわけ…)

パシヤリ

「へ？」

シャッター音で我に返ると何故か嬉しそうな顔をし、二葉がスマホを構えている。

「コウさん凄い似合ってますよ!!」

「え!?!…」

「凄く可愛いですよ!!コウさんも服も！」

「…」

予想外のコメントに混乱している私をさておき、二葉はスマホのカメラで写真を撮り続けている。

(しまった…コイツりんと趣味が同じかあ…)

「コウさん何時もおしゃれな服を着ればいいじゃないですか！素は美人何ですから勿体ないですよ！」

「あくもう恥ずかしいから写真撮らないで！」

「ドウワガスツ!？」

モデルの写真を撮るプロのカメラマンの様な動きで撮られる事に我慢の限界が来て、二葉にタツクルをして動きを止めた。

「痛…ごめん二葉…やりすぎた…」

二葉を止めるのに必死だった為加減を間違えてやたら凄い勢いでタツクルをぶちかましてしまい、今は私が二葉を押し倒した様な体制になっている。

「凄く綺麗ですよ…コウさん…」

自分の下にいる二葉の普段聞かない様な甘い声に何故か鼓動が早くなり、顔が熱くなっていく。そして何も考えられなくなっている。

「二葉は…私をからかって…楽しい?…」

「からかってなんかないですよ?…」

「嘘…他の女の子にもそう言う事言ってその気にさせて楽しんでるんでしょ?…」

「そんな事はしてません…それより顔が紅いですよ…大丈夫ですか?…」

「誰のせいだと思ってるの?…ほら…ここだって…」

「コウさんに手を掴まれ、とある部位に誘導された。」

「コウさん…」

「責任…とって…」

「…どうすればいいですか?…」

「今日だけでいいから…私のモノになって…」

俺はそれに言葉を使わず、瞳を閉じて回答した。

「チュ…」

コウさんも意味が解ると無言のまま唇を重ねた。

休日のヴァルキュリア2

「コウさん、大丈夫ですか？」

ラザニアの材料を買いに行った近所のデパートの帰り道。未だに足元がおぼつかずそのため俺と腕を組んだ状態で歩くコウさんを心配すると、顔を伏せたまま首を僅かに縦にふった。

「だ…大丈夫…」

圧迫感の残る腰とヒクヒク動くお腹を軽くさすり、力の入らない足を動かす。

「激しくしすぎだよ…」

「痛かった…ですか？」

「最初破る時はやつぱりね…でもそれ以外は…察して…」

「良かった…俺とコウさんだと体格差があるから…でも普段聞かないようなコウさんの声聞けて嬉しいですよ♪とても可愛いかったですよ、因みに俺は凄くき…」

「う…うっさい言うな!!馬鹿…あんなけ出してればわかるよ…」

『…』

先的行為を思い出し、お互い無言になり顔を紅く染めた。

『…』

何も話さないコウさんに組まれた腕から早い鼓動が伝わって来るのが何故か嬉しく思うが、結局無言のままコウさんの部屋に着いてしまった。

「やつぱり…今日だけ何て嫌です…」

「え?ごめん、今何て?…んツ!？」

閉まるドアの音で二葉の声が聞き取れず鍵を閉めたのを確認し終え、二葉の方を向くといきなり唇どうしが重なり塞がった。

「…今日だけは…俺のモノなんですよね?」

「ちよ…待って!!んツ…ここ…ここで?」

唇が離れると二葉は怪しい笑を浮かべしやがみこむと、スカートを捲り秘部から薄い布を口で脱がし紅く充血した部位を舌で舐め始めた。

「ふ…二…葉あ…」

必死に声を堪え二葉を引き剥がそうとするが全くびくともせず、寧ろ舌が中に侵入し更に声がかみ上げてくるのを堪えるため口を手で覆った。

「二葉…辞めツ…て…」

消えそうな声だが確かに二葉には届いているが、辞める気配はなくまるで飴を舐める様に行為を続ける。

「ふ…ふたばあ…待っ」

「コウちゃん居る?」

『!?』

自分もたれかかっているドアの反対側から二葉もよく知る人物の声が聞こえ、思わず2人の動きが止まった。

「コウちやくん居ないの?」

「出ますか?」

「こ…こんな状況で出れるわけないじゃん!!」

今のコウさんは以上に顔を紅く染め太もを濡らし、誰が見ても不審に思われてしまう。

「じゃあ居留守ですか?」

「それしかないでしょ!」

「じゃあコウさんのスマホの電源きりますね」

「な!?いつの間に…」

コウさんのポケットからスマホを取り出し、電源をきる。

「電源が切れてる…コウちゃん…電話にも出ないわ…」

「切っというて正解でしたね♪」

「た…確かに…んツ」

スマホを下駄箱の上に置き、立ち上がりながらコウさんの濡れた太ももを舐めると声を堪えながら体がピクピクと痙攣する。

「二葉ってもしかして…太もも好きなの?…」

自分で言っておきながら恥ずかしがり太ももをすり合わせ、スカートを掴み丈を無理矢理伸ばし太ももを隠そうとしている。

「大好きです…太もも…特にコウさんの」

「んんツ…ちよつと…今は!？」

汗などで滑りが良くなったコウさんの太ももを撫で堪能し、上へ行き指を深々と突き立て前後運動を始めた。

「クツ…クツ…」

先程とは比べ物にならない位に声を出してしまいそうになるのを必死で抑える為会話が出来ず、只二葉の服を掴み堪える事しか出来なかった。

「…音出すとりんさんに気付かれちゃいますよ?…」

「ツツ…」

(我慢しないとりんが…私の後ろに居るのに…二葉とこんな事してるのがバレちゃう)

「ふた…ば…り…んが…りんが…あツ…んんツ…」

必死に出した言葉は断片的で虚しくもスグに我慢の限界が来てしまい声が溢れ出そうになるが、それを飲み込む様にまた唇が重なり吃った声が多少漏れる程度で済んだ。

「留守かあ…タイミング悪かったな…帰ろう…」

脱力し俺に寄りかかるコウさんから唇を離し、ドアスコープからりんさんが帰ったの確認する。

「りんさん帰りましたよ」

「ハア…ハア…気付かれるかと思っただじやないか…馬鹿二葉…もう嫌い…」

「俺はコウさんの事大好きです…」

「…バカあ…」

身長差により俺の胸元に顔を埋めるコウさんの背中に手を回し抱きしめると、何だかんだ言いながら俺の背中にも手を回し互いに抱きしめ合う。

「お腹空いたけど…二葉と触れ合っていたいけど…何か…眠い…」

「疲れたんですね、ご飯出来たら起こしますから寝てて下さい」

「ごめん…手伝えなくて…」

「気にしないでくださいはい」

トロンとした眠たそうな上目遣いのコウさんの頭を撫で靴をぬが

し、お姫様抱っこをしてベッドに寝かせる。

「何だろ…太ももが敏感になってる…」

「…俺が触り過ぎたからですね…」

「好きな…人に触れられるの…凄く嬉しいから…いっぱい…触って…」

ゆっくり瞼を閉じ、可愛い寝息をたて始めた。

「さて、コウさんの為に美味しい料理を作りますか」

オデコにキスをしてキッチンに向かった。

「コウさん起きてください!!ご飯出来ましたよ!」

「んん…二葉あ…私何の位寝てた?…あれいつの間に着替えたの?」

上半身を起こしベッドの淵に腰掛けた状態になり、寝ぼけ眼を摩る。

「1時間位です、寝てる時に着替えさせました」

「…エッチ…」

「今更ですよ…今更」

「だね…じゃあ、ん…」

「はい?」

両手を俺の方に伸ばしてくる。

「抱っこして運んで」

「え?」

「あんな事するから腰に力入らないし、二葉は私の脚触れるんだよ」

脚をわざと開き、綺麗な太ももを見せてくる。

「分かりましたよ…」

「ありがとう二葉♪」

太ももの魅力半分、コウさんの推し半分に負け背中と膝に手を回し持ち上げる。

「どう私の脚は?」

「凄く俺の好みです、ずっと触ってたいです」

「エッチ…」

「え!?!…」

「冗談だよ、てか二葉のお姉さんの事は大丈夫なの？今1人なんでしょ？」

「大丈夫ですよ、メールしたら成美…姉さんの面倒見の人が来ているので心配ないです、よいしょっと」

コウさんを座らせ、自分もその反対側に座る。

「え!?これ全部作ったの!？」

「そうですよ!コウさんの為に腕によりをかけて作りました!」

「出来合いのモノは?」

「フランスパンやチーズ等の材料を抜けば全部手作りですよ?」

「え!?!:すご…」

テーブルにはどれもお店で出される料理と見間違える程のクオリティーに言葉を失う。

「今回のメニューはラザニアに鶏肉のバジル焼き、オニオンスープにサラダ、フランスパンとそれに付けるクリームチーズです!」

(何だろ…この圧倒的敗北感は…心の女子の部分がモヤモヤする…)

「どうかしました?」

「な…何でもない…これ写真撮っていい?」

「ええどうぞ?」

「一応りに連絡しとかないとね…心配してるだろうし、ちゃんとご飯たべてるよ〜つと送信、それで電源OFF!!」

「え!!返事来るんじゃないんですか!？」

「平気平気〜面倒臭いし気が散るからね、さあ早く食べようよ〜お腹ぺっこだよ〜」

「大丈夫ならいいんですが…じゃあいただきます」

「ま〜す」

「あ、コウさんはまずスープから飲んでくださいね」

「え!?!」

手を合わせラザニアにフォークを突き立てようとするコウさんを止めると、お預けされた犬の様な顔で見つめられる。

「な…なんで?…」

「昨日から何も食べてないんですよね?いきなり物を入れるのは体に

良くないので、スープから飲んで胃を慣らしてください」

「うう…ズズ…あくスープ美味しい…でも固形物を食べたいよ…」

「飲み終わるまで食べるの待ちますから」

「ズズウツ…飲み終わった!!」

「はや!？」

「ねえ飲み終わったから食べていいでしょ?…」

「ハア…どうぞ…」

上目遣いに負け仕方なく犬で言う待てを解くと、コウさんはラザニア等の固形物を食べはじめた。

「ん!!凄く美味しい!!」

「良く噛んで食べて下さいね」

空になったスープの皿にお代わりを注ぎ、再びコウさん側のテーブルに置く。

「ありがと♪」

「いえいえ」

コウさんの笑顔を見るだけで許せてしまい、心が満たされる。

大好きな人と共に食べるご飯が何時もより美味しく感じられ、とても幸せな気分だ。

(でも甘やかし過ぎるのは良くないよな…俺)

「りんの作る料理より美味しいよ」

「アハハありがとうございます、そう言えば1つ聞いてもいいですか?」

「ん?なに?」

「コウさんの後ろの棚に飾られている写真何ですけど、何かコウさん雰囲気違くないですか?」

「…」

突然料理を食べる手が止まり、俯いてしまった。

(あれ…聞いたら不味かった…かな?)

「あの写真ね…私とりんがイーグルジャンプに入社したばかりの時に撮ったんだ…その時は私は今以上にコミュニケーションが苦手でさ、何時もムスツとしてたんだ…だから色々人付き合いで問題が起つて

さ…」

「コウさん…」

(また…またこの感覚…ひふみさんの時にも感じたこの感覚は…)

フオークを置き寂しそうな笑を浮かべる彼女の顔に、何時ぞやの時と同じ虚しさと胸の痛みを感じた。

「意外でしょ?…」

「い…いえ…そんな事は…」

「いいよ、気を遣わなくて…ねえこんな時にするような話しじやないけど…私の昔話を聞いてくれる?」

「…俺で良ければ」

「フフありがとう…さっきも言ったけどコミュニケーションが苦手ですつとムスツとしていたんだけど、最初の方はりん意外の人達も気を遣って声をかけてくれたんだけどさ…思っている事をストレートに言ったり、気を遣わなかったりしてたらどんどんその数が減っちゃってます…そして入社して1ヶ月の頃にフェアリーズのキャラデザに私が選ばれたんだけど…それを境に他のキャラ班のメンバーから色々されてね…実力ない奴は引っ込んでろとか、コネ、とか言われてね…酷い時には手を出されたりしてさ…何人も会社を辞める人がいたんだよ」

「コウさん…」

目の前に、すぐ近くにいるはずのコウさんが何故か遠くにいる様に感じどう声を掛けたらいいのか分からず、ただテーブルの上に置かれた彼女の手を優しく握る事しか出来なかった。

「二葉の手…おつきくて…暖かい…それからね…しばらくして、青葉と同じ高卒で入社してきた子が居てね…丁度その頃にフェアリーズ2の制作が決まって私はADになってさ…厳しくし過ぎたみたいでその子…辞めちゃったんだ」

「…」

彼女の過去を知る度に胸が痛むが、逆に虚しさが消えていく。

(そっか…この虚しさは…俺の知らないコウさん達の話がされたからか…だからコウさんの事を知る度に…)

「つて…何で二葉がないてんだよ…」

「え？…あ、俺泣いて…」

虚しさが消えると、自分が無意識に涙が零れていた。

「す…すいません…で…でも…俺…えつと…」

「大丈夫…ゆっくりでいいから落ち着きなよ」

感情が溢れ出て気持ちを言葉に出来ない俺の隣にコウさんが来ると、優しく抱きしめてくれた。

「二葉は…私の部下になつてどう？…」

「お…俺…コウさんが…本気でゲーム作つてるつて…本当にゲームが好きだつて分かつてます…その子に厳しくしたのだつていいゲームを作ろうとしたからだつて…分かつてます…だからコウさんの部下になれて俺良かったつて思つてます…きつと青葉ちゃんだつて同じ事思つてますよ」

「ありがとう…凄く嬉しい…私も二葉や青葉が部下で良かったつて思つてるよ…さあ辛気臭い話はおしまい、折角二葉が作つてくれたんだから冷めちやう前に食べちやおう」

「ですね！…」

「ごちそうさま〜美味しかったよ二葉」

「お粗末さまでした、食器片付けるんで貸して下さい」

「あ、それ位は私やるよ？」

「でも…」

「作つて貰つたんだから最後は私がやる！これ上司命令!!」

「パワハラですかあ〜」

「訴えても無駄だぞ！」

「アハハじゃあお言葉に甘えて食器洗いをお願いします、シンクまでは運びますね」

「ほーい任せて、二葉は適当に寛いでてよ」

「お任せします！」

食器をシンクに置き洗い物をコウさんに任せ俺はスケッチブックを取り出し、絵を描き始める

。「コウさんはクラスで言ったらヴァルキュリアですよね」

「え何で？」

「何時も何かと戦っている感じなので」

「戦ってる…かあ確かに…」

何時も一人で歩んでいたあの頃は、確かに色々なモノと戦っていた。

りんにも相談はしないでまだ愚痴だけを聞いてもらっていたあの頃に、もし二葉達がいてくれたら、誰も傷つかせないで済んだのだろうか？。

「因みにヴァルキュリアのコウさんの装備はこんな感じですよ！」

真横に来てスケッチブックに描かれた絵を見て驚く。

「うわ!!私そっくり…でもやっぱり脚が強調された装備なんだ…」

「た…たまたまですよ！」

「へえたまたまねえ」

「すいません嘘です…」

「プツ…アハハ全く…二葉はムツツリだな」

「そ…そんな事はないですよ!!」

でも今笑っていられる。

きっとそれは今、二葉達に出会えたからだと思う。

夢い夢

「凄い、色々描いてる」

食後の珈琲を飲み、壁に寄り掛かり胡座をかく俺の脚の上に座るコウさんと共に俺がスケッチブックに描いた絵の鑑賞会が始まった。

「思い浮かんだキャラを描いてますから」

スケッチブックに夢中なコウさんのウエスト当たりには手を回し自分の方に密着させ温もりを感じ、顔を肩に載せシャンプーの香りを嗅いで八神コウと言う存在を堪能している。

「んツ…二葉くすぐつたい…あっこれロボット？」

大体スケッチブックの半分のページを開くと、今までは人間タイプのキャラが描かれていたが次のページには人型ではなく、まるで戦車から手足が生えたようなロボットが描かれていた。

「それは二足歩行戦車ですよ、まあロボットと同じ様なモノですが…馬鹿にされるかもですがこの歳でロボットが好きなんですよね…」
恥ずかしさで火照った顔をコウさんの後ろ髪に埋める。

「別に馬鹿になんてしないよ、別にいいんじゃない？だって二葉しっかりし過ぎて逆に心配だったんだけど、そう言うのが好きって分かったから安心したよ♪モデルガンも好きなんだよね？デスクに飾ってあったし」

頭に伸びてきたコウさんの手に優しく撫でられる。

「好きですよ、でもモデルガンは18歳以上の物もありますから大人なイメージがありますけど、ロボットは…やはり子供のイメージが…」

「んじゃあ、今からロボットを卒業しろって言ったら出来る？」

「ウグツ…」

唐突な難しい質問に答える事が出来ず、只頭を撫でられ続けた。

「ほら、無理でしょ？それにはじめ至っては女性なのに戦隊モノ好きなのに堂々としてるだろ？ショーまで見に行ってるらしいし」

「確かに…」

「だから好きなら好きだって堂々としてればいいんだよ、他人がどうだからって言って好きなモノを好きと言えないのは心から好きじゃないってことになるんだよ?」

「ぐもつともです…」

「だから堂々と好きでいればいいんだよ」

「コウさん…」

「ん?何?」

撫頭をでる手を離しスケッチブックのページを捲るコウさんの名を呼ぶと、俺の方を向き互いに見つめ合う形になった。

「好きです」

「…」

その時コウさんは哀しそうな笑を浮かべ、何も答えたはくれなかった。

「ぐちそうさま〜」

「お粗末さまでした〜食後のデザートプリンアラモードです」

スケッチブックの鑑賞会から数時間後。コウさんのリクエストでオムライスを夕食で作り、デザートのプリンアラモードを冷蔵庫から取り出しコウさんの前に置く。

「うわ!!凄っ!?!、二葉って本当に家庭的だよね」

子供の様に喜びながらプリンの甘さを堪能する彼女を見る度に何故哀しそうな笑を浮かべ、何も答えなかったのか、その疑問が心に引っかかっている。

「二葉?二葉!」

「え?ど…どうしました?」

「いや…何かぼーっとしてたから…二葉は食べないの?凄く美味しいよ!二葉が作ったプリンアラモード!」

口の端にクリームを付け、スプーンを御機嫌に振るコウさんの声で我に返る。

「あ…良かったら…食べます?」

コウさんに言われプリンアラモードを食べようとするが、胃の余裕

がある筈なのに食べる気にはなれずコウさんの元に置き、代わりに食べきった食器をトレーに載せ片付け始める。

「いいの?」

「どうぞ、俺お腹いっぱいになってしまつて…」

「サンキューー! そんじやいただきまゝす!!」

デザートは別腹とはよく言ったもので、1口1口味わつて食べるコウさんを見ても心は満たされず、代わりに悲しみが心を埋め尽くした。

「もう…こんな時間…」

「ん、何か言つた二葉?」

「い…言え…何でもないですよ! 口の端にクリーム付いてますよ」

「ん、どこ?」

「反対ですよ…んっ…」

「え? ちよっんっ…」

付いているのは逆の場所に舌を出し舐めとろうとするコウさんに代わり、俺が舐め取りついでにそのままキスで唇を塞ぐ。

「良かった…美味しく出来てますね」

「な…何すんだよ二葉!」

「何つてクリームとつて、味見ですけど?」

「味見なら私が食べる前にやりなよ!! クリームだつて普通に取つてよ!! いきなりキスされると本当にびっくりするんだからね!」

「ハハツすいません♪さして洗い物〜」

未だにキスに慣れず、顔を紅くするコウさんを目に焼き付け、エプロンをかけて食器を洗い始める。

「♪♪♪と洗い物終わり!」

「ねえ二葉」

「はい?」

濡れた手をタオルで拭きエプロンを外し、またスケッチブックを見るコウさんを胡座をかく脚の上に載せ自分の体に密着させる。

「さつき歌つてたのはなんて歌?」

「俺何か歌つてました?」

皿を洗う事に夢中で自分が歌っていた事に気づかないうえに、人前で歌っていた恥ずかしさで今度は自分が顔が紅くなる。

「えっと確か…コホンッ…♪♪♪って歌詞…私歌上手くないから音程とか違うかもしれないけど…」

わざわざコウさんが赤面状態で歌ってくれたお陰で、自分が無意識に何を歌っていたのか理解する事が出来た。

「ああ、その歌ですか」

「良かったあ…分かってくれた…それで名前は？」

「届かない恋です」

「届かない恋…んく知らないな…何てグループが歌ってるの？」

「これは俺が通ってた高校の先輩が最後の文化祭で作った歌なんですよ」

「へえく凄い！、オリジナルの歌なんだ」

「そうなんです、結構話題になって高校のホームページで短い期間ですがダウンロード配信してたんですよ、俺のウォークマンにfullで入ってますけど聴きますか？」

近くにある自分のバックから赤いウォークマンを取り出し、イヤホンを差し出す。

「聴きたい！」

イヤホンを左耳に俺は右耳に付け、歌を再生させる。

「…これ…結構切ない歌だね…」

「そうなんですよ…」

「…ごめんね…二葉…」

「…どうしたんですか？急に…」

コウさんが何に対して謝罪をしているのか気付かないフリをする。

「今日の事…二葉のはじめてを奪ったから…」

「コウさん俺!!」

「ダメッ!!」

「ッ…」

突然声を荒らげるコウさんの気迫に押され、口籠もってしまった。

「今の二葉の気持ちは本物じゃない…きつと上司や部下の関係以上の

行為をした勢いでそう思ってるだけだよ…」

「コウさん…」

コウさんは少し俯くと俺の手に抱きつくくと、手の甲に冷たいモノが落ちてくるのを感じた。

「そろそろ帰らないと…お姉さんが心配するよ…」

「…」

きつと手の甲に落ちたのは涙で、表情は見えないが彼女は今泣いている。

「…私が二葉を唆して遊んだって…今日の事は夢と言う事にして忘れて…」

コウさんは立ち上がると、俺のバックにスケッチブックや荷物を入れはじめた。

「明日の仕事がんばろう」

正直、自分自身の気持ちが分からない。今心の中にあるモヤモヤした気持ちは初めての事で、もしかしたらコウさんの言う通りで好意は偽物なのかもしれない。

「はい、二葉の荷物」

「コウさん…」

バックを差し出す手を引っ張り強引に引き寄せ、そのままキスをする。

「二…葉…苦しい…」

「…すいません…」

今までで一番長いキスから口を離す。

「じゃあ…俺帰ります…」

「うん…」

自分でバックを拾い上げ、コウさんからゆっくり離れ玄関に向かう。

「お邪魔しました…」

「うん…また明日ね、気を付けて…」

玄関口まで見送りに来てくれたコウさんに軽く頭を下げ、無理矢理笑顔を作り今日の事は夢だったんだと自分にいい聞かせ部屋を後に

した。

「…参ったな…」

帰宅後風呂に入り自分のベッドに横になって数時間後、一睡も出来ずに起床時間が来てしまった。

眠れなかった原因は自分自身、理解している。

「コウさん…」

彼女が痛みを堪える時に付けた背中への傷の痛みを感じ、眠れなかった原因である人物の名前を呟くがその声は虚しく部屋に消えていく。

「ハア…起きるか…筋トレは…今日はいいか」

流石に寝てない体で運動をする気にはなれず、とりあえず顔を洗って目を覚まさせる為洗面所に向かう。

「…うわ…クマ凄いな…」

洗面所の鏡に映るの自分の顔のクマに驚く。

「眠い…顔洗ったら目覚めるかな？…うう冷たッ」

冷たい水で顔を洗い眠気が幾分かマシになり、朝食の支度をする為いつものようにキッチンに向かった。

「ごちそうさま〜美味しかったよ二葉君」

「お粗末様、食器さげるね」

「ああすまない、所で二葉君」

「ん？」

「本当にクマ大丈夫なのかい？目も腫れているようだけど」

「うんクマも目も大丈夫だよ、顔を洗ったら眠気とんだし」

「そうか…じゃあ行って来るよ」

「気を付けて」

「二葉君もね」

「うん」

外に出るまで何でも振り向きやたら心配する姉を見送り、小さく切った林檍が入った皿を持ち四葉のケージ中に手を入れると、掌に乗りよじ登ろうとしていた。

「ケージの外でゴハン食べたいの？」

「チュー!!」

俺の言葉が伝わったのかは分からないが返事をする様に鳴いた四葉をケージから出し、テーブルに起きその隣に林檎の入った皿を置く。

「この林檎は凄く甘いから美味しいよ」

「チュチュー!!」

嬉しそうに林檎を食べる四葉を見て和んでしまったらしく、今朝よりも強い睡魔に襲われ瞼が下がって来た。

「ヤバ：今寝たら会社…に遅刻…する…」

瞼を開こうとするが鉛の様に重く感じ、開くどころか完全に閉じてしまい眠りについてしまった。

「チュー!!…」

「ん?…四葉…」

「チュー!!チュウ!!」

四葉の鳴き声と擦れる感覚で軽く目が覚める。

「チュー!!」

「どうしたの四葉？」

顔を上げると、慌てている四葉が前足で俺の手を軽く引っ掻いていた。

「チュー!!」

「あれ四葉…俺寝て…って!!今何時!？」

慌てて時計を確認すると、何時もなら電車に乗っている時間になっていた。

「ヤバ!?遅刻する!!、四葉起こしてくれてありがとう!」

四葉を落とさないように手に載せケージに戻し、急いで身支度を済ませ会社に向かった。

「ハア…遅刻かな…」

つり革に掴まり下りる駅が近づくにつれ、憂鬱な気分になってい

く。

「でも走れば何とか間に合うはず!…」

やがて下車駅に近づいた電車が減速を始める。

「すぐ改札を抜けられる様にパスケースを出してっ」と

電車が完全に停車しドアが開き、全力で走り出す。

「良かった…どうにか間に合いそうだ」

駅から走る事数分、時間に少し余裕ができ早歩きに切り替える。

「ふ…二葉くん…ま…待って〜」

「ん?…あ!…ひふみさんおはようございます」

苦しそうな声で呼ばれその場で止まり、振り向くとひふみさんが息を切らしながら俺の方走り寄って来ていた。

「お…おはよう…ハア…ハア…二葉…君」

「大丈夫ですか?…この時間にここにいるって事はひふみさんも遅刻ですか?」

とりあえず苦しそうなひふみさんの背中を擦り、ゆっくり歩き始める。

「ありがとう…もう…大丈夫だよ…私は遅刻じゃなくていつもの時間…だよ」

「え? 駅から走ってきたんじゃないんですか?」

「違う…よ?…歩いてたら…二葉…君が走って…私を…追い抜いていったらから…追いかけたの…二葉…君は駅から…走ってきたの?」

「はい、遅刻しそうだったので…」

「それなのに…息がきれてないなんて…凄い…ね!…私は…ちよつと走った…だけで…バテバテだよ…それに…しても凄い…クマだね?」

「アハハ…実は昨日寝れてなくて…二度寝をしまして遅刻しかけたんですよ…四葉が起こしてくれましたよ」

「可愛い!! 四葉ちゃんは本当に二葉くんを懐いてるんだね!」

「あ! ハアハア…二葉くん…ひ…ひふみ先輩〜」

情けなさを感じながら苦笑いで今朝の事を話すとひふみさんが自然な笑を零し、言葉のキャッチボールをしているとまた苦しそうな声で呼ばれ、ひふみさんと共に振り返る。

「あーゆんさんだ」

「そ…その後にも…誰か…いるよ?」

「あれは?…青葉ちゃんですね」

かなりの距離を走ってきたらしく、フラフラになりながら走るゆんとそれを追いかける青葉ちゃんと言う光景が目に入る。

「ゆ…ゆん先輩くハアハア…私もう走れませくん…ハアハア…きや!?」

「アカン!!青葉ちゃん!!」

「青…葉ちゃん!?!」

「青葉ちゃん危ない!!」

歩っているのか分からないスピードで走る青葉ちゃんが自分の足に躓き、そのまま転んでしまった。

「あれ…今日は随分と寂しいな?」

珈琲を淹れ自分のデスクに戻ろうとした時、始業時間の割にやたら静かな事に違和感を感じ、二葉達のいるブースを覗くとはじめ以外誰も椅子に座っていないかった。

「まだ連絡がないから少し遅れてるんじゃないかしら?」

「…二葉…もしかして私のせい?」

「コウちゃん何か言った?」

「え!?!いや何でもない!」

突然りに顔を覗き込まれ我に返る。

（二葉…大丈夫かな…このまま会社を辞めるとか…ならないよね?…）

「八神さん顔色悪いですけど大丈夫ですか?」

「ん?…あ…ああ全然いつも通りだよ!全く!4人も遅刻だなんて気がゆるんでるのかな?…ここは厳格な態度で接するべきだな!」

「はじめえそれ失敬過ぎない?」

『おはようございます』

「あーちよつと4人揃って遅刻って!!青葉どうしたの!!」

二葉達の声に何事も無かったと安心し、立场上遅刻の事を注意するべく入口の方に体を向けると、右膝を擦りむき血を流し、目の下に濃いクマがある二葉にお姫様抱っこをされている青葉の姿に驚き思わず珈琲のカップを落としそうになる。

「青葉ちゃんどうしたの!?!」

「ゆん一体どうしたの?」

りんやはじめもその光景に驚いている。

「会社の前まで走ってギリギリ始業時間に間に合いそうだったんですけど…」

「青葉ちゃんが転んでしもうて…」

「鞆…の中身が…全部出ちゃって…」

「それを拾ってたら始業時間を過ぎてしまい、おまけに青葉ちゃんが怪我をしてしまったて…俺が運んで来たんです…」

「転んだって!!大丈夫なの?青葉、救急箱何処だっけ?」

「はい…ちよつと痛いですが…大丈夫です」

「俺、消毒液とか絆創膏持ってるんで大丈夫ですよ」

「そういい笑う二葉だが、明らかに無理に笑っている。

「そ…そう?じゃあ青葉の事任せるから、今日の所は遅刻じゃない事にしといてあげるけど後で遅刻届はだすように」

『分かりました』

それぞれ自分のデスクに行き椅子に座り仕事を始めるが、俺は青葉ちゃんのデスクに行き椅子に座らせ手当を始める。

「ちよつとしみるけど我慢してね」

「あ…あのー…」

「ん?」

「手を…握っててもいいですか?…ちよつと怖くて…」

「いいけど、ティッシュ当ててないと消毒液が垂れちゃうよ?」

「ティッシュは自分で抑えるので大丈夫です」

「そう?じゃあ垂れない様お願いね」

「はいー」

ティッシュを抑えるのを青葉ちゃんに任せ、空いている左手を差し出す。

「うう…ちよつと怖いなあ…あ、二葉さんの手…大きくてあったかいですね!」

「え…そうかな?…」

「コウさんと同じ事を言われ昨日の事を思い出し、チクリと心が痛む。

「なんか安心します!」

「そっか、じゃあ消毒するね」

「は…はい!」

消毒液が傷口に付いたとたんに青葉ちゃんの顔が苦痛で歪み、体がビクンツと跳ね上がった。

「痛ツ…クツ…」

「もう少しだから我慢して青葉ちゃん…」

「は…はい…」

左手に青葉ちゃんの温もりを感じ、昨日のコウさんとの出来事を思いだしながら擦りむいた箇所消毒液を付けていく。

「終わったよ、後は絆創膏を貼るから手はなすよ?」

「は…はい…うう…痛かったです…」

「アハハ良く我慢出来ました、偉い偉い」

いまだに涙ぐむ青葉ちゃんの膝に絆創膏を貼り終え、傷の手当が全て終わった。

「ありがとうございますごきます二葉さん!ゴミは私が片付けますね…いッ…」

「青葉ちゃん!」

血の付いたティッシュ等をゴミ箱へ捨てるべく椅子から立ち上がった瞬間に、傷とは別の痛みに襲われ椅子に崩れる様に座った。

「イタタ…転んだ時に足首を捻ったみたいですよ…」

「青葉…ちゃん…大丈夫?…」

「なんや足首を捻つてもうたんか、青葉ちゃん大丈夫?」

「ひふみさん、ゆんさんすいません…少し痛む位なので大丈夫ですよ」
「無理はダメだよ青葉ちゃん、一応腫れてるか見るから」

「いや…あの…二葉さん…」
「ん？」

靴と靴下をぬがし足を自分の膝に載せようとした時、何故かモジモジして膝に足を載せない青葉ちゃんを不思議に思い首を傾げる。

「二葉くんちよつと耳貸して」

「はじめさんどうしたんですか？」

はじめさんに手招きされ近づき、はじめさんの方に耳を向ける。

「…足を膝に載せちゃったら角度的にほら…見えちゃうから…あれが…」

「あ、ごめん青葉ちゃん!!そこまで考えて無かったよ!!」

はじめさんから理由を聞き、慌てて青葉ちゃんに頭を下げ謝罪をする。

「い…いえこちらこそすいません…」

「後は私がやるよ、テーピングなら持つてるから」

「すみませんはじめさん、お願いします」

青葉ちゃんをはじめさんに任せ、自分の仕事に取り掛かった。

数時間後のお昼休み。

青葉ちゃん達はお昼ご飯を食べに外出中で、俺は食欲がない為、睡眠欲を優先させキャラ班のブースで仮眠をとる。

「二葉」

眠りについてからどれ位経ったのかは分からないが、誰かに名前を呼ばれ体を揺さぶられる。

「二葉、二葉ってば」

「その声は…ひふみさんですね？」

「人が本気で心配してんのにボケンな！」

「痛い…」

頭を少し強めに叩かれ体を起こすと、横にコンビニの袋を持ったコウさんが立っていた。

「イタタ：どうしたんですかコウさん？」

「寝不足大丈夫？…」

「大丈夫です、少し寝たら大分楽になりましたから」

「そっか：なら良かった：お昼は何か食べた？」

「いいえ、食欲なくて…」

「でも何か胃に入れとかなないと持たないよ？…私が食べさせて：あげようか？…ツナマヨおにぎり」

ゆんさんの椅子に座りコンビニ袋からおにぎりを取り出し、ファイルムを向いていく。

「：食べます」

「ほい、あーん」

「あーんッ」

「美味しい？」

「はい、美味しいです♪」

「私達の上してる事変だよね：付き合ってる訳じゃないのにさ」

「：友達以上恋人未満って感じ：ですよね：：ごちそうさまです」

「お粗末様…」

おにぎりを食べ終わると、気まずい空気が流れる。

「何か変な関係になっちゃったね…」

「ですね：でも今まで通り普通に接して下さい：もう勘違いしたくないので…」

「二葉がいいなら…」

「あの、高坂二葉さん居ますか？」

「俺ですけど？」

「あれどうしたの阿波根？」

気まずい空気を裂くように声をかけて来たのは、入社したばかりの時にディレクターであるしずくさんを乱暴に引っ張っていった、阿波根と呼ばれている色黒の女性だった

「阿波根さん？…変わった名前ですね？」

「阿波根は苗字です、名前はうみこと言います、実は二葉さんに話がありました」

「話ですか？」

「はい、今日仕事が終わった後にプログラマー班と複数人でサバゲーをやる予定だったのですが、プログラマー班以外の人が出来なくなっ
てしまつて…そしたらしくさんがキャラ班の高坂二葉と言う人の
デスクに銃が飾つてあると聞いたのももしかしたらと思つたので
す
が…仕事終わりに私達とサバゲーしませんか？」

血塗れの髑髏

「よし！青葉も村人が全員完成したね！」

「ハア…本当大変でしたよ…」

「んじやあ次は1からキャラデザお願いね！」

PCの画面に映る青葉が作った村人達を全てチェックし終え、一息つく彼女に次の仕事をふる。

「えー!?ほ…本当ですか!?!」

「本当、本当〜これ仕様書ね！因みに二葉は青葉より多く村人を作って貰ってたけど、とつくに終わらせて、青葉と同じようにキャラデザしてもらってるよ〜」

「え!?もうですか?、始めたのは私と同じなのに…」

青葉が来る前にキャラの設定だけを書いた紙を渡す。

「うう…なんだが不安です…」

「絵以外経験ないのにここまで出来るなら上出来だよ！二葉の場合は専門学校の時からこのこと同じ事やってたらしいから」

「そうなんですか!?!…二葉さんの通ってた専門学校ってどう言う所なんですか?」

「実は詳しくは知らないんだよね…私も葉月さんから聞いたから…ただかなり有名な所らしよ」

「葉月さんにですか」

「ん?私を呼んだかい」

『うわ?!葉月さん!!』

ブースの入口の壁にもたれ掛かり、脅かした事に満足した様子で葉月さんが青葉の隣にくる。

「二葉君の通ってた専門学校について知りたいんだろ?」

「は…はい」

(一休どこから話し聞いてたんだろ…)

「コホンツ、それじゃあ聞かせてあげるよ」

葉月さんは咳払いを合図に語り始めた。

「まずキャラクタートキら学院って聞いた事あるかい?」

「はい、テレビでよくCM見ます！」

「結構有名でしたよね？」

「ああゲームを作りたいならキャラットきらら学院って言われてる位だからね、それにプロを育てる、即戦力を造るをキャッチコピーにしているだけあってかなりハイレベルな事を教えているんだ、故にその生徒1人1人の技量も高いんだ」

「そんな凄い所なんですね…」

「そうさ、それで私の知人がそこで学園長をやってねえ、たまに飲みに行くんだけどその時に私の生徒にイーグルジャンプで働きたいって言う子がいると言われてね、と言われその事について話しこんでいたら分かった事があるんだよ」

「働きたい子ってのが二葉なんですね？それで分かった事ってなんですか？」

八神さんも話の続きに興味がある様で珍しく、話に食い気味になっている。

「そう、それでさつきも言ったけど生徒1人1人の技量が高い中で二葉君は全てにおいて遥かにレベルが高かったんだよ、首席で卒業した二葉君の事を友人が言っていたんだ…天才と…」

「…」

「…」

確かに二葉の技量の高さは理解していたが、話を聞くに彼の実力が想像以上である事に驚き、言葉を失う。

「フッフ、そう言えば涼風君の次の仕事はキャラデザだったよね？」

「は…はい」

（本当に何処まで話聞いてたんだろ？…）

「なら二葉君にキャラデザのやり方を聞いてみるといいよ、二葉君はどういう風にキャラデザをしているんですか？…って」

「それはいいですね！…でも教えてくれますかね？…そしたら参考にさせてもらいたいのですが…」

「別に機密情報って訳じゃないんだし教えてくれるよ！あと学園祭の為に二葉君が作ったゲームを私持つてるから仕事終わったら私のデス

クに取りにくるかい？きつとこれも参考になると思うよ？」

「二葉さんが作ったゲーム…ですか…」

「何か参考になるしいんじやないかな、青葉？」

「じゃあお願いします！、仕事が終わったら取りにいけますね！」

「うんうん！それじゃあ序に少しお話をしようじやないか！」

「見つけましたよ…葉月さん」

「う…うみこ君…ウグ!？」

何時ぞやの時の様に鬼の様な形相で葉月さんの元にうみこさんが早歩きで近づくと、勢いよく葉月の腕を掴み曲げてはいけない方向に曲げ始めた。

「イタタタタツ関節が!!うみこ君それ曲げちやいけない方向だから！曲がつちや駄目な方向だから!!」

「全く…少し目を離すとすぐ何処で遊び呆けるんですから…一層の事歩けない体にしてしまうと言う選択肢も…」

「うみこ君顔が！顔が本気だから!!」

「まあ冗談ですが、今日は定時に帰りたいと言いましたよね？だから早く書類をチェックしてください！さあ自分のデスクに戻りますよ…では失礼しますね、二葉さんのお姉さんもくるそうですね！楽しみにしていますよ八神さん」

「う…うん…分かった」

「イタタタタツ折れる！腕が折れる！助けて〜八神！涼風君〜！」

「腕が折れるのが先か葉月さんのデスクに着くのが先か…楽しみですね♪」

「ぎゃああ!!」

痛みに顔を歪め助けを求めながら、ブースの外に引きずられる葉月さんをただ見ている事しか出来ず、そして葉月さん達はブースの外に消えていった。

「なんかホラー映画っぽかったんですが…大丈夫なんですか?…」

「まあ葉月さん次第かな?…私達も仕事に戻ろっか」

「はい…分かりました」

「期待してるからな、青葉！」

「へックチツ…へックチ…へックチ…」

コウさんから次の仕事を貰い自分のデスクに戻り、早速作業を始めると連続のくしやみをして鼻をかく。

「風邪…かな?…」

「二葉…君…大丈夫…風邪?…」

「連続くしやみ大丈夫?」

「アハハ、もしかしたら誰かに噂されとるんかもしれへんよ?」

「大丈夫ですひふみさん、はじめさん、変な事言わないで下さいよ、ゆんさん…まあ風邪より噂のが…悪口とかでは無かったらマシ…ですかね?」

「そうなん?まあホンマに風邪やったら大変やし、ちよつとオデコだして」

「え?…」

「ええから、早く早く!」

「あ…はい…」

ゆんさんに言われた通りに前髪をかき揚げ、オデコを突き出すと、彼女のひんやりとした手がオデコに当てられる。

「ん、熱はあらへんからやっぱり誰かが二葉君の事を噂してたんやね!」

「え…俺何か変なことしたかな?…」

「あれ?皆さん賑やかですけど、何かあったんですか?」

キアラのチエツクから帰って来た今の状況を理解していない青葉ちゃんが頭に?マークを浮かべ、自分のデスクについた。

「あ、青葉ちゃんおかえり〜今な!二葉君のくしやみが風邪か噂か調べてたんよ♪結果は多分噂されて出たくしやみやったけど」

「くしやみですか…大丈夫なんですか?…」

(それってもしかしてさつき葉月さん達と二葉さんの話しをしてたからじゃ…)

「風邪じゃないみたいだからね、多分平気かな?…それより村人達のチエツクはどうだった?」

「全員OK貰えました！それから次は仕様書を貰ってキャラデザをする事になりました…」

「どんな…キャラを…描くの？…」

「えっと…サーカス団に入団したばかりの18歳の女の子で、明るい色のツインテールが特徴で真面目で元気だが少し天然なところがある」

(あれ？…青葉ちゃんの事かな？…)

「主人公一行を次のダンジョンへ案内する途中に…盗賊に襲われて死んじゃうみたいですよ…」

「なんぎやなあ…」

「確か二葉君もキャラデザ頼まれたんだよね？どんな仕様書を貰ったの？」

「俺はですね、伝説の魔術師と謳われている21歳位の男性で黒い髪とタレ目が特徴、兄的な立ち位置で主人公を助け正しい道へ歩ませる時があれば、時たま見せるSな性格や悪戯心で主人公達で遊んでいるが魔術の腕は本物。」

マイペースで家事が得意」

(こっちは二葉君のことかな？)

「それで！それで！」

何かを期待している、キラキラとした目をした青葉に見つめられる。

「あ…えっと…ごめんね青葉、このキャラは主人公の仲間になるし、後々操作出来るようになるから死なないんだよ…」

「そうなんですか…」

「アハハ…青葉ちゃんドンマイ、でも21歳で伝説ってちよつと…幾ら何でも若すぎじゃないかな？」

「それなんですけど、過去に人魚の肉を食べたから不老不死になったそうです、本当は見た目以上に歳をとってるようです」

「でも死なないんですよ…」

「アハハ、死なないんじゃないかって死ねない、が正しいかな、不老不死だし！」

「ブー!!、二葉さん嫌いです…」

「なんで!？」

「兎に角嫌いです…」

「え…」

(どうしよう…俺のキャラが青葉ちゃんのキャラを蘇らせるって言い難くなっちゃった…)

それから数時間後。

「ん…初めてのサバゲー緊張するな」

「それがきつと良い思い出になりますよ、八神さん」

何とか仕事を終わらせ、定時に上がることが出来き、プログラマー班の方々と合流し目的地に着いたが、また姉さん達は到着していなかった。

「そう言えば私は二葉から鉄砲、阿波根からゴーグルとか借りたけど…二葉は自分の荷物だけで鉄砲とか持ってないけどいいの?」

「うみこと言っているでしょ!!、最悪レンタルすれば大丈夫でしょ?」
「えつと…俺が何時も使ってた装備を姉さん達が車で持って来てくれる筈なんです…」

駐車場で姉の車を探すが見当たらず連絡をとるためスマホを取り出した瞬間1台の車が近くに駐車し、それが姉の車である事を確認し駆け寄る。

「遅れてしまって済まないね…二葉君」

謝罪の言葉と共に、白いシャツに黒いスキニーパンツ姿の姉が運転席から出てきた。

「遅くなって申し訳ありません…二葉…」

それに少し遅れて白いTシャツに薄い黄色のカーディガンにデニムのショートパンツ姿の外国人風の女性が車から降りてくる。

「大丈夫だよ姉さん、成美さんも気にしないで下さい」

「この方々が二葉さんのお姉さんですか?」

初対面である姉さん達に挨拶をするべく、阿波根さんとコウさんが車の近くにやって来た。

「えつと、俺の姉さんは黒髪の女性の方です、その隣が姉の後輩です」

(え〜：私と一緒にでたらしない人って聞いたけど、めっちゃくちやスタイル良くて美人じゃん!?)

「失礼しました：私は二葉さんと同じ会社で働いている、プログラマー班のうみこといいます」

「えっと、私は二葉さんの直属の上司でキャラ班リーダーの八神コウです」

「弟がお世話になっております二葉君の姉、高坂一葉です」

「私は楠本・カータレット・成美です」

「楠本さんは日本語が上手なんです」

「成美でいいですよ八神さん、私はロシアのハーフですが、日本で産まれたので日本語は得意なんです」

「へーだから上手なんです！私もコウでいいですよ！」

「はい！分かりました！」

血塗れの髑髏2

「サバゲーって男の人ばかりだと思ってたけど、意外と女性も多いんだね?」

サバゲー会場の女子更衣室で阿波根から借りた装備に着替えながら、当たりを見渡す。

「ええ男性の趣味と思われる事が多いですが、女性も趣味にしている人も多いんですよ、それはそうと一葉さん達は空いているロッカーを見つけれたんでしょうか?」

「どうだろ…この有様だからね…この様子じゃあ男子更衣室も凄いいんじゃない?」

更衣室が混雑している中で自分の隣には阿波根がいるのはたまたま隣のロッカーが空いていたからで、一葉さん達は空いているロッカーを求め自分達と別れそれつきりだった。現に一緒に入った阿波根以外のプログラマー班の面々とも散り散りになってしまっている。

「空いているロッカーを探すのは一苦労ですが、決して無いと言うわけではありませんからかね」

「だね、所で阿波根」

「はい何でしょうか?、後うみこです…貴女が苗字で呼ぶから二葉さんからも阿波根と呼ばれているんですよ!」

「アハハ…私が二葉から借りたこの鉄砲の名前は何?」

ロッカーを閉め、鍵をかけて二葉から借りた鉄砲を阿波根に見せる。

「右手に持っているアサルトライフルがMK18 MOD1 EBBで左のハンドガンがU.S. 9mmM9ミリタリーGBBパーカライズドですよ」

「名前なつが…覚えられないからいいや」

「貴女から聞いておいて…まあいいですけど、では着替えが終わったなら外で待ちましよう、その方がここにいるよりも一葉さん達に合流しやすいですし」

「だね」

鉄砲を持ち更衣室から出で少し通路を歩くと、自販機などが設置された休憩スペースにプログラマー班の面々が既に揃っていた。

「うみこさーん！八神さーん！」

「おや、皆さんもう着替え終わっていたんですね？」

「はい！早めに着替えて外で待とうって皆考えてたらしくて」

「んじや後は二葉達だけか、それにしてもよくこんな時間なのに皆集まったよね？」

「まあ屋内フィールドですから日が沈んでも出来ますし、それだけサバゲーが好きと言う事なんですよ」

「すっげ〜熱意…」

「なあアレ!？」

「うそ!?本物か？」

「私…初めて生でみた!!」

「ん?何か辺りが騒がしいなあ」

「確かに何かあったんでしようか？」

一葉達を待つこと数分、周りがざわめき始めた。

「ねえあれ!!」

ざわめきの原因を見つけるため、他の人の迷惑にならぬ様に小さく首を動かし辺りをうかがうと、プログラマー班の1人がある1点を指さす。

「皆何見てんだろ?」

皆の視線が集まる場所に体ごと向けると、とても印象的な格好をした3人組がこちらに向かって歩いていった。

「何あれ…すごい」

全身黒色々で統一された装備、顔全体を覆うまるで返り血を浴びた様な赤い塗装をされた髑髏のフルフェイスマスクが印象的な3人組で、何よりただならぬ雰囲気を出している。

「まさか…」

「あの人達の事知ってるの阿波根?」

「ええサバゲー界ではかなり名が知られていますから」

「…」

静かに興奮する阿波根を只見守った。

「数々のサブゲートの大会で頂点に君臨したチームです、故に皆の憧れの存在であり、皆の倒すべき存在：素顔を誰も見たことがなく、そしてまるで返り血の様なペイントから血塗れの髑髏（ブラッディスカル）と呼ばれています、ですが最近姿を見せないと思っていたらこんな所で会えるなんて…」

興奮する阿波根の他にブラッディスカルの3人組からでる威圧感に耐えきれずその場から遠ざかり、気付けば自分達の周りに人殆どがいなくなっていた。

そして3人組は自分達の目の前に来ると止まり、フルフェイスマスク越しにこちらの顔を1人1人み始めた。

「…阿波根何やってんだろ?…」

「…私が知る訳ないでしょう…」

「俺達が最後でしたか…待たせてしまいました」

『え?…』

嫌な沈黙の中耳に入ってきたのは聞き覚えのある、況してや数十分前に会話をしていたよく知ってる声だった。

「更衣室が物凄く混んでいて空いているロッカーを探すのに手こずってますって」

「これなら車の中で着替え方が早かったですね」

「まさか二葉達なの!」

「はいそうですよ?マスクが邪魔ですね…」

「すまないね、今マスクを外…」

「ちよつと!?!そのまま大丈夫だから!」

今まで素顔を見た者がいないと言われていた彼等が、いきなりマスクを外そうとした為慌ててその行為を止める。

「大丈夫ならいいんですが…うみこさん一体どうしたんですか?…」

「いえ…気にしないでください」

(まさかあのブラッディスカルが実は同じ職場だったなんて…)

呆れ半分、驚き半分の感情がこもった顔の阿波根の気持ちを察し肩をポンと叩く。

「まあこんな事もあるよ…」

「八神さん…そうですね、では皆揃った所でフィールドに行きましようか」

サバゲー界で有名なブラッディスカルと共にフィールドに向かうだけでプレイヤー達の目線がささり、時たま聞こえる「ブラッディスカルが他のチームと一緒にいるぞ!」や「あのブラッディスカルを傘下にしているのか!」「あのブラッディスカルが傘下に!?!」って事は一緒にいる奴らがブラッディスカルを倒したって事か?…一体ナニモンなんだよ!」等と全く身に覚えのない事を噂され勝手に強者扱いされてしまい、耳を塞ぎこの場から逃げてしまいたくなった。

「…ねえ阿波根、私達周りから勝手に強者扱いされてるんだけど!…」
「…仕方ありませんよ…彼等が正式な試合以外、ましてや他のチームとサバゲーをしているのを見たと言う話を聞いた事がないんですから…それがいきなり他人のチームと一緒にサバゲーしていたらそういう噂も出てきますよ…」

「ふえ…これじゃ虎の威を借る狐の気分だよ…私初心者だし秒殺される…」

「大丈夫です、流石に二葉さん達程では無いですが腕には自信があります、容易くヒットはとらせませんよ」

隙間

「よし、こんなもんかな?」

今日サバゲーで使った銃や装備の手入れを終え、何時もの場所に並べていく。

「やっぱり体を動かすのは楽しいなあ…ん?電話だ」

久々のサバゲーの余韻に浸っているとスマホが着信音を響かせ、ディスプレイを見ると涼風青葉の文字が表示されていた。

「はいもしも?」

(あ…あの…涼風青葉…です…高坂二葉さんですか?)

「アハハ、俺のスマホにかけて来てるんだから俺以外に電話出ないよ!—と言うか何で緊張してるの?」

緊張した声の青葉に思わず笑ってしまった。

(で…ですよね…あの私男の人とあまり電話した事ないので…すいません…今大丈夫ですか?)

「ああそう言う訳ね、うん大丈夫だよ、それでどうしたんだい?」

(えっとですね、今日は仕事の件で二葉さんに相談がありました…)

「俺に相談?」

(はい…今日八神さんから仕様書を貰ってキャラデザを頼まれたんですが、なかなか描けなくて…それで参考として二葉さんが専門校の学園祭の為に造ったゲームを葉月さんから借りたんですけど…二葉さんはどうやってキャラデザをやっているのかと…)

「俺が学園祭の時に造ったゲームって一応人間のパイロット居るけどロボットモノなのに青葉ちゃんやったの?」

学園祭の為に造ったゲームは突如現れた巨大生物を6人のパイロットがそれぞれロボットに乗り、巨大生物を倒していくゲームだ。(女子の私がやっても凄く面白かったですよ!パイロットのキャラやロボットのデザイン、それにゲーム自体もクオリティが高くて時間を忘れてプレイしちゃいましたし…それで二葉さんはどう言う風にキャラデザしてるんですか?)

「アハハありがとう!俺は最初にキャラが登場する世界を想像するん

だ、今はフェアリーズストーリー2のキャラデザをしてるんだからその街とかステージをね」

(そこからですか!?)

「うん、そして仕様書があるなら想像した場所に大まかに仕様書通りのキャラをイメージするんだ、それで大体キャラがイメージ出来たら頭の中で戦わせたり街で歩ってみたり動かしたりするんだよ」

(頭の中で動かすんですか?)

「うん、そうしていくとこのキャラにはこう言う服や鎧、髪型が合うとかイメージが固まってくるんだ」

(ハア：やっぱり才能の差かあ…)

「ん？何か言った？」

(い…いえ！ありがとうございます！夜分遅くにすみませんでした)

「ううん平気だよ、そのうち青葉ちゃんのやり方が見つかるから大丈夫だよ」

(うう…だといいいんですけど…)

「焦らず自分のペースで描けばいいんだよ」

(わかりました！それじゃあおやすみなさい)

「うん、おやすみ」

二葉との通話を終え、再び何も描けていない紙を見つめ項垂れる。

「葉月さんから天才だって聞いてたけど…まさかこんなに実力差があるなんて…ハア：私もしかしてキャラ班の皆の足引っ張っちゃってるのかな…提出日延びちゃうことあるし…ってダメダメ！悪い方に考えちゃ！二葉さんだって焦らず自分のペースでいいって言ってたし！そのうち二葉さんに追いついてみせるー！」